



りとびきに

美



の等虫京南・蚊・蚤!時いユカで虫毒

関係が

是是用于



是吹ニキル・物・ビ薬・に

阪大。京東

館天順谷桃

社關係の人々

---- (NO

廻轉椅子……(云)

CIED

(量)

家…(三)

……麻生路郎選…(5)

たがりあくんさ

111 柯川 桑隹 法信

紙 ((笑顔の配給)福井哲撮影……

2	初	草	武	怪	筆漫	
いっかいころ	初等川柳講座	木	玉		銃後の	
	柳	徒	Щ		0	9
-	講座	然	研	570	句ひ	ì
F		m:	究	晋:	O	10
	无					9
	1	-	0			S
		1				j
		1				3
	麻	曹	輕森植 子 本	前	路	
				and the same	郎	-
	路郎	門樂	省東陸二魚山	五雕	生	-
					1	
	00	(10)	00		生…(1)	
	0	0		0	0	1

男のわすれもの ……………………中島 省電の網棚へ ………………北川 春巣… (三) 忘れぬことども …………れ付付根民郎… (三) 見捨てられた小切手 ………西田 艸樂… (二) れもの ……………井上 湧三… (11)須崎 ………………濱田久米雄… 豆秋…(二)

川柳一卜筋… 瞬長 室まで ………小山 文三… (三) 頭の先と足の先 ………夷 班鋒·一笑·石毘·(III) 一 笑… 一笑…(三 栗…(三

奉天に住めば

評月 柘

包 後 銃 それぞれ、副があ 心得とか校長心得 も知れない。市長 可笑しくないのか あるから、アレで 長などと云ふのが どにも、廣告部次 たる一流新聞社な と云ふのはをかし 副は兎も角、次長 り、次長がある。 とか云つた風に、 いと思ふが、堂々

どうかと思ふので、既に故人となつ だ。生きてゐる人で例をあげるのは 方が、幾らかいいのかも知れない。 た人で例をあげて帰偏りでない設定 はなからうと思つてゐるが、たしか ことは全く人間ワザで出來ることで のに、五十も六十も長を持つと云ふ ターつの長でも相當骨が折れる筈だ 仲には欽張つて、一人で長を五十 心得がくつついてゐるよりも次長の にそうした人がゐるからエライもの も六十も持つてゐる人がある。タッ

> 長はいらなくなるらしい。 云はない。ウンと偉くなると、もう ばない。首相とは云ふが、相長とは らしいが、大臣だけは大臣長とは呼 でもかでも長がつかねと氣がすまめ だらうと思はれるほど多數の會長を 本人もおそらく一々記憶してゐない あつた。その人が亡くなつた時に、 長をしてゐた人で、何んとかの責任 いいだらう。こんな人たちは、何ん の長を持つことからしてやめた方が れてある時代だ。一人で幾つ何ン十 缺陷だと思ふ。行政も簡素化が叫ば る方も受ける方だ。長制度の大きな を感じて首を吊つて亡くなつた人が て行く方も持つて行く方だが、受け としよう。名は秘すが大阪で府會議 してゐることが判つた。會長を持つ

事長だとかが夥しく殖えた。そして

えて、理事長だとか委員長だとか幹

(四)敵性語と敵性文字

らうう それでは少し粗野に感じられるであ では聞きとりにくい。何れ「ヨー ある。自動車の用語として「よろし その仕事に應じて生れるべきもので ろしいが、その用語と云ふものは、 うに日本語に改めた。その精神は上 車」「停車」「よろしい」と云ふや ーライニや「ストップ」を厳して「砂 や運轉手の常用語になつてゐる「オ シーぐらいに省略されるであらうが い」は長すぎるし、發音上騒音の中 最近ある乘合自動車會社で、車掌

ではないかと思ふ。例へばランプや やるのも愉快ではないか。殊にもう 例もあるので敵性品を逆に騙使して 日本化してゐるものはそれでいいの ハンカチを今更洋澄だとか年巾だと 戦地でも鹵獲品で敵を斃してゐる

りらしい。全くフンバンものである よく、面白い。これで陶器一式の積 何んのことか判らない。その下に ない。某百貨店前の店の看板にオー たところで、痛くも痒くもありはし はてて、敵性文字を看板から塗り潰 はないか。忙しい世の中で、今更あ 盟主の貫禄を示してやるのも一策で 中の言葉で便利なものは、それをド か云ふ必要はあるまい。むしろ世界 ALL CHINA とあるので、い ものだ。そんなものが書かれてあつ ふすことは時間と費用を損する位の シドシ日本語化して大東亜共榮圏の ルトーキと片假名で書いてある。 (五)女

銃後の女性はハリ切つてゐると書

があたからとて、女性一般の張切り れぬが、多少ボヤーしてゐる女性 くと嘘をつけと云ふ人があるかも知 かと疑はれるやうな柄と色彩も交響 を擔いで歩いてゐたやうな手荒い柄 て出勤してゐる女性さへゐる。布團 買ッ無けのワンピースに身をかため で染直しだと睨んでは失禮だが、 てやらればウッだ。女性の色彩もズ 方を見遁がすことは出來ない。 じめたのではないかと思はれるほど 散霧消した。今度は地味な競争をは ムで飛び出して來たのではあるまい が消えてなくなり、友禪の寝卷のま ンと地味になった。衣料切符の關係 マと云ふ奴が影を没した丈でも買つ 親爺連が毛虫のやうに嫌つたバー

戰削の組織でも、市長、町長、村

事務長、醫長、藥局長、師團長、會

あたが、

近ごろは特にそれが

眼立つ 長と云つた風に、長制度が行はれて

て來た。町會長、隣組長だけでも大 したものだ。そこへいろんた曾が確

係長、校長、船長、驛長、病院長、 長藏長、社長、局長、部長、課長、

でもない。全くの話だ。(路即生)

ある。これはオベンチャラでも何ん

の女性は斯くの如く質質になりつく 電車の中まで黑つぼくなった。銃後

五 五

もめ盃の抄へ流れ矢

せる場合。酒席ではまくある情景。 ので、一層の事と抄人へ盃をうけさ 「まあ押へて」とか、ごたくする 塵山=「流矢」とは巧みに言つた 東魚=「さす」とか「うけぬ」とか、

省二=「抄」は酌人――なる程。

笠にしてあふない所を袖の思

な折りに袖で隱くす。 笠の事なり。見つけられてならぬ様 (武・十六) などの如く、此句も袖 (武・十三)。「陶かくす嫁の袖笠 省二=「揚枝を遺ふ口へ袖笠」

ひ方が、作者も得意のところであら が頂かれない。 塵山=自分には、此の「袖の恩」 東魚=前説通り。「袖の恩」の云

女房を持た晩から旦那也

森

する。私でも經驗がある。(女房の 武·十一)。 方からは、「初に旦那と呼で吹出す」 省ニーその晩から旦那様に大變化

た。 と、吾乍ら微苦笑する趣であらう。 塵山=九尺二間なれど、家も持つ 東魚=は人あオレも愈々旦那だな

いてうの下へ病身な乳母

(73)

がある。 りとて』などある。銀杏と乳とは縁 、心持ちであらう。「川柳江戸砂子」 人、此木をもつて療すれば、奇瑞あ 善福寺の杖鳧脚の項に、『乳なき婦 は勤まらぬ。公孫樹に乳を祈願する 東魚=思ふ様に乳が出ねば、乳母

して居る。 掛けてある。その一ケを手元に保存 た。私の郷里にもあり、願懸繪馬が る公孫樹が、東京では諸所に有る。 省二=雑司ケ谷鬼子母神にもあつ 塵山=善福寺の外にも、願懸をす

東魚=主人が亡くなつたのであら

ちに、何處かへ退轉とみえて、賣居 の札が張られてある哀れな有様。事 先頃忌中札を張つたがと思ふう

目であらう。正しくは「賣据」と書 塵山=賣居の札を貼るのは、四代

の如き不幸も時にある。 省ニーよくへの事であらう。 句

御上屋敷へ隱す誕生

屋敷に於いて、御世繼の御誕生。窃 かに恐悦を申上し上る。 かなどに、子を産せた場合であらう。 省二=「誕生」と据えたのは、男 塵山=三太夫の分別に由り、御下 東魚=表向き妾としてない、腰元

の子に相違ない。

煙いめをして衛士の入智

目をして恥しさうでもある。 柄からの洒落。殊に入聟だから煙い 東魚=「煙をつとめを忠實にし 省二=「煙い」は衞士の、お役目

落である。 て」と云ふ意味であらう。 塵山=衞士と煙、持つて廻つた洒

日に干せは尼の枕も人くさし

る詠みとなし。 間的な女性)感じがすると、同情あ でも、日に干せばどこか人臭い(世 東魚=「人くさし」は、露骨な云 省二=出世間の寂しい尼さんの枕

> を誘はれる氣分がある。 ひ方だが面白い。女の髪の匂 塵山=尼法師と稱しても、

(78) たましに箸も流れて澤若葉

子である故。

まく箸が流れてくる。一箇の點景 省二=若葉を觀賞して居ると、た 東魚=清流に臨んで割り籠など開

那邊に有るのであらう。谷または峰 とした方が適切かと思ふ。 れて、凉しげな感じがある。 いた趣が、「箸も流れて」に聯想さ 魔山=特に澤とした作者の意は、

(79) 大往生に終かふり出す

の銭をまくのであらう。 東魚=大往生であつたので、

定の場が聯想される。 省二=花が降るのでなく、錢がふ 塵山=「八犬傳」の犬山道節の火

(80) 舅の署る智の糸衛

はならぬ。

るとはうれし。確に大往生でなくて

つせ働く一方の聟なのであらう。 の氣に入るまいが、糸鬢などで、 塵山=糸鬢といふと奴のやうに想 東魚=本多に結つたりしたら、舅

省二=現代なれば、「聟の五分刈」

はれるが、律儀に能く働く器であら

『糸鬢になる言譯の種』など詠まる。 那は物が云ひやすし』。尚ほ此編に とでもあるべきところ。

女郎花ころへハ只ハ起られす

口達者なのがある。 われ落ちにきと人に語るな、 塵山=草花でも女の字が附くと罪 東魚=落馬で尻持ちをついても、 などと

もなし」と云ふのだから、況んやこ 省二=『女郎花見て行きすぎる人

夜ル豊と二度に夫婦の迎來

ろべば、只では起きれまい。

若旦那を、迎ひに出向く場合ででも あらうか。 東魚=忠賞な夫婦者が、居續けの

らうつ 女を晝夜に分けて、招待するのであ 塵山=冠婚葬祭の時に、客人の男

要る。 等確實な手蔓は得られない。 想像してみる丈けで、句面からは何 省二=「迎來」の場合を、 前句が 色々と

(83) 身の明らめの引かふる夜谱

眠つてしまへば、一時は忘れられる。 に努めるより、外に良思案もない。 東魚=えく仕方がない、寝る事だ 省二 = 夜着を引き被つて、諦らめ

> 50 塵山=榮華の夢でも見た方がよ

(84)

とろほうめ茶に行く真の唐物屋

で、盗人程なぼろ儲けをするのだら かれてゆく。又變なものをはめ込ん 東魚=唐物屋の主人が、茶席へ招

を獲るのである。 舶來の物品を賣買して、 省二=句の構成に無理がある。 塵山=唐物屋とは骨董商のことで 不正の巨利 7

れも前句に關聯してのことならん。

(85) 柳より九輪か秋ハ際ニ成

難解ものだ。 地自然を詠むだものか。下五が聊か りしくと眺められる、秋の静寂な天 切なものなのだ)。九輪などが、あ をよく見受ける。九輪研究は最も大 物空輪の事。(近時、塔の研究文章 九輪」は塔の頂きにある柱狀の飾り 省二=「柳」は散る柳ならん。

は、少し合點がゆかぬ。 のであるが、それが秋は隣になると 旋狀の金具で、最も人の目につくも 塵山=九輪は高塔の頂上にある螺

きかと考へたが、結局解し得ない。 東魚=九輪は九輪草の事にてはな

> でしまひけり」(一茶)など詠ま 輪草」(竹茂)。「九輪草四五輪草 らしく思つたのであるが……。 る。原句「秋」とあるので、塔の句 春咲くもの、「飛石に残る伽藍や九 九輪に似て居るとて名附けられ、晩 省二=九輪草は、やはり花が塔の

(86) 今の姿も朔日を吞

ける次第。 が止まるといふ。即ち一種の避姙薬 として、姿や後家が否みもした。 『持藥さと朔日丸を後家は吞み』。 東魚=流石に職域の養生を、心掛 省二=朔日丸ー朔日に吞むと經水

士二

11

步襲虎

爲

塵山=此の姿は、其者の果に相違

(87) 我娘去ル御屋敷とはかりなり

さり氣なくすむ。 なる。さる御屋敷へと云つて置けば (姿奉公など)さらけ出すことにも 省二=色々と喋べつては、 恥

尙更哀れである。 塵山=細しく言はぬが花である。 東魚=吉原御殿などとなつては、

また何か言たき裾をふまへ鳧

(88)

で 省二=未だ何にか言ひ足りないの 裾を押へて止めて居る。

> を强く表現したのではないか)。 まへ」は踏むのではなく、押へる事 東魚=追ひすがつて、何か言ひ足

・分で、 あるから、 力 さうとする場合で、立たんとして自 塵山=他人の裾を踏むのは無禮で わが裾を踏まへたのではない 自分の裾を踏むのであら

9 武玉川研究正誤表(二三四號) 行 (誤) 企



子と政お考鉛言

にの治父へ筆は 甘戀論さりが

いも戦んや折ま

父自爭の會れあ

で問論初はた感

眠自は戀なや情

がやは前た寢齡

つめずに友るで

相くれ浪

るばとな

3

るかせ

れ答も

ぬのう手な

夜末言はつ

ス建下語碁 築情學の 史に棚本 無はタを IT 駄 通 イ開 は をじ語け 褒給マて 金 めはレ駐 の 抜 ず 1 在 く江語所 一月アお 千にン留

年佳ナ守

みン

語

パ弱薬常 ジりで會 ヤ目身は を再 着祟亡檢 り ぼ 討 た 目しで 將 軍でま お さすし茶 んとたに は病とす 俘上年る

り増 大阪府高石町 房 T 云 あ 3 戶

孤 篷

乘英

越語

見

た切

手 b

を 7

燒

カン ウ

す I

4

島

語習

才

CL

T 5

田

塔柳川



路-郎 =選

食

糧

\$

1

買

5

T

來

3

湯

0

戾

果

六ア

十十

越つ

しは

てニ

社 人

長理

の髪

や屋

めあ

れて

溫を待

临 奥 村 丹

路

柳 路

5 2

老

家口

岩

峪

筧 馴 3 あ 合 h 中 Ch 高 かる 金 0 魚 左 集 10 と CA 餌 潮 分言 を 2 國 P から 生 0 2 力 T to. 見 3 悲

> 劇 3 村

世

上 角

堂

井

長

野

b

明弟捷四靴回訪診世 るはつ十を覽ね察が 虫國度は板來を厭 てて待に 方籠のつく を幸 必姿 1 百つな 持福 3 16 の日部つ つに隣五主咳屋た 雲鳴 十人の戰と b のるは過も春ふ言 坊 峯 花 佐 ぎ 裸 を 本 ひ ね 鋏渡たにさばつ お腰てすか T b 襟 3 H * * な 3

撰 都 明 石 柳

次

探ぬ秋奥臨 しけの座終 も毛雲敷へ のき巨指鶏 百びきでが お卵 圓しく 紙やみさを 幣菓えへ産 の物たたん 下籠吾米だ にのがの聲 あよ生虫 りて命

落 5

水 谷 鮎

美

临

(2) K 2 0 財 產 16 Ch 0 tha

らわ ずな 戶 倉 普 天

タ茄グ 豆大 賜一軍 榮家ホ 露八キ皇漫 見李變やそふ 遠人世 闇子ラ 腐 阪 暇 服 神 藤政 1 赞月二民才 舞下哲けるる 處 生 話 をのイ まさ 買の 000 の婦ム 火を1だは 客 4 \$ 4 なはす 僧いダ くニる ふ孫 兵畦動 廻のラ へ毛ネーい 自ぬ無そでと C 3 -1 のを 妻のウ 轉靴ン 蟲皮はツつ 馬けく ではは 上十七 と家不 10 見 の煙イ 椅を床 をの澤ポか の瓜幸飲知嶮 座 五 云 も郷悪 へ年う 判に 手草ン 子 麡 屋 つ兵山ン戦 話田福ん らし なにを しものですい がく LKF はく鉄 まはあえ地 座でて る神は く住越 要る ほ火に 良はの む嚴るシで てず日割仲道 語めえ く女音 るに -0 を風 だとぞア觀 歸ぎが勘人も 好に見 b るた 判ぎ 見借强 ま房 々なた を 顏佇征とた りた落覺頭あ 爺りが 繼身汗 から わめや b をらし がちかい女 ハちえ搔る ぐのに 要め 抱れ りきめ 倚 イててき所 3 h is ゆ捷 ねるし 大き り か 勿 丰 3 T 旭 大 大 605 2 4 なれ 世 本 阪 阪 略 路 1 阪 b 間 ガ 石 野 福 須 長 1/5 曾 谷 JII 崎 元 井 根 Ш 靜 豆 吐 民 = 觀 郎 秋 容 司 堂 打

子 川 力 母二虫官ま悠 み座不ウ塗月 大女欠 發有大なあ族 2 L の等の命た々 じ禪足ヱ下並 衆事伸 動難使かいの は料 0 わ 年車鳴のあ自 めし料1駄な 喫務す 機い館ノそ四 徑一 親理 タ國し「づつ 中 何でく子し適 IC 00 さて女ヴで文 茶服る 0 度乙た轉たと 立だずにか辻 のま はしだが颯學 野の上 フ芸 雲金ま仇し入 ぞし 積 き女よ勤 娘ばまど爽少 球ほで 茶 h W 5 b 2 3. 盛らつうと女 励る鳴 を魚りのの營 得 みき だ て髪佛つ、散 りくての來詩 りろる バもか方言の 意 持戀 籠 もを印てと歩 を過拂て がびの ツ秋へもへ旗 0 つを 3 を 二縫は 朣 知 カン す結かし素な 闡去つう 27.7 クにる男る 夜 ワ 2 6 でびらて直り はをとの にな灯振女あ B のる U 人は鳩 2 時 游左袴 ふきとピ 居 さ時 すりに りとふ なご 忘ある 小和 あ を れふらび子は Tb 働 1 りれ計 T そ b かと 0 Ch 12 3 < ス よ 16 苦 10 4 かっ 3 大 费 げ 育 (bz ~ 身 L 知 阪 生 阪 中 b き 5 6 IE 西 11: 丸 里 ず 尾 本 JII 刑 尾 春 水 潮 紫

花

香

客

5

棐

巢

宿叱か診今生 殺 長 簡軍稻慰日災 硝 驛 鉢 ガ蟲一子 1 モ 雨 子前卷 チ賣匹供 題らら察週き 生 命 素事の間の害 ラシを 水の末 はれくへはて姉るく防買る 化便穗文丸の 戸ので縣 ヤののも 中 Ch 単の (前蠅 へ銃が今は視 は看起 左 く板て K E 雑きん ペ後播日伸察 に積とをはる のが一 立で ンをれはびう の横は のオ夜シ さり笑開ぬお 氷 續 揆 魚 接着キ たチ汽ン のなてハろな 字 丁 水 せのふいお蔭 はきの 運じるガノづ にか福 いョ車の 大根レ て遲無て客で 遠終樣 " びる故キ 4 ならも てヤの音 3 刻情醫に腰 慮ひな 阪 るン族に つ戻物 蜡 落の者有が なは姿 辯 ット のや郷にとだ てりな 蛤着男は難痛 く故で 8 征 のうの書ひけ 家一にな 会服 の人あれ 釣けに掛うく ろに道きるで 抗 5 解障す 居 ず い着を切がす - Wit 二 为 り T りてけ な けで 3 下間る こき行れへみ厳し ね 0 てす 関カン とくずり 3 阪 按 ili な 櫻 中 西 逸 H 川 - 見 內 Ш 久 不 · 灯 愁 米

ス教 秉 只 水街錢 錠 浸 誰急潮 ま ② ワ橋 汽 秋梨耳凉色 ン桁 の林鳴台け 夕 壇 洗二 道灯湯 も造見 だへ 車 前水 のへの復のの罹 へ 日 彼の舞 1 瓜 ピに正 0 雨車り誰し 1 6 くは ま二 四窓のやは 見 連病 も後娘 1な魂 族 水も修 スり扇 國に様ちお 奉で夫 お梅 世 がう理 1階 をん 山秋にお前 す 誘で し配が看名に 仕安婦 姬酢 友し達 帶 脈のも辭の さに 禪身 ひ將 つ電出 門人 籤否が 0 引霉素 がの 愚 連風想儀足 九十 し士 かが來 00 ん染 年 あ幸 ながふしの 女を り成た 戶氣 なね足 がめ 痴 0 事し れあ虫てす 出っ煙 が配 8 1c c あて b 今 を 務の はたが い來來 る賣 絣 日 洩 るりのとわ と顔 流す あぞ 6 整ほり 後 TI じら出 6 モーり れる り知 L りだ た めし h 2 2 寄 b る ~ 3 あ 尼 F b 隊 Ch 飯 临 思 H 津

高

H

抱

逸

水

雄

给

木

石

歷

水

竿

小林

文

月

芳

國

弘、

4

休

6

夷

笑

泣三幽冷白 き等科藏靴 ベ局醫庫を で専梅履 た出酒け 在 カン し冷ば てす V 養に た 寫 と子借 置 女をも 4 居搜ら多 あ るしれい 0 てるこ T

1

日手

本を

語 舉

教げ

授に

支や

那な

抜ん

目體

た 軀

しと

思

~

な

bo

人 6 建

設

ま

づ

軒

F

を

洗

CL

カン

け

喝

K

將

目

ば

た

き

il:

85

得

か

敵些

下將軍バー戦記を

ー製

一あ燈 鐘あ火 程そ管 こん制 ぼ左征 し事 音 7 8 は 麗 あ 3 のつん おたの 茶と額 は女も く給見

あれのず W す 谷 口

配う

給や

のむ

ビヤ

10

ル手

~ 10

足か

でつ

赤て

くは

左物

b 言

1

生

中

カ

1

1

0

2

死

尼

鲢

飯

尾

寄

與

史

綠 薬

道道道道溢嫁休七仁人蜩何正手 草草草草難き閑ン丹形をを直辨 のがとへお地べのの追すに當 他實手道犬く世イで鼻ふるとで 人が品草はれ話にぼと人人る來 の入のコ知柄が母れはをかとれ り種1らが過娘た知笑朝寫ば 計過をヒな次ぎの分らうか眞皆 ぎ買飲い々て柄はずたち屋ん うん額かるが口蠅歸犬いな to 岩 補てででは出同へが還をやに み回く居食つ來じ入來兵運が美 戦るるひてと事れる れらや

> 來な h

話事事 で務務 はあ二 の人 心 露揃 强路へ きかば 4 ら强 事 \$ 3 務出な で b 給 CA

電女女

れま 礼 丹 酒 井 美 知

夫

バ靴情隻表 せ音怨腕情 をのにも ウ織焰間な のふにけく 眼日あば自 はさら柏働 ヘザ手原 佛 あ顔のの とりの出た は咄痣來 70 左 3 ぬ締 礼 ~ 愚 b 痴

大過し 阪 ぎ

竹 Œ

八

柳

何しマ 紙入 香亡 汽生 默虫新臨 時やツ 芝團 典き 船ビ のベチ を後 行 1 居は友 3 出场 3 日るの 排 12 かだ火 つう し綽 2 5 て軍 出名 俺 け 讓 机加加 を記し 保神 16 もしり を h 險にか 0 2 焼や合 俺 呼 かべう 屋な F はん 0 れらて やる 何で 方す るなる つ氣 時し 面夏 煙女中 死た かの 5 てな

ぬし

るま

22

立なで 大つき消 布る ま え 阪 施 6 井 上 すい

來り

上 湧 黎 光

々き聞時 とけで雇 萬ばく 要 年手る 想 青紙ん は書で 庭きる にたて あ 5 8 忘 6 れな難ば 000

れに酒そ

け

b

阪 武 部 香 林

音

坊

(九)

生

郎

檢討することにいたします。 持つてゐるかと云ふことから とか輕薄とか輕佻とかいふ熟 といふ文字は、どんな意味を 例によつて、輕味(かるみ) 輕味の輕といふ文字は輕卒

就て

輕味の句に

女房に聞いては流すものは

うだとか斯うだとか、一つ一 つ口をはさんでゐる女房の眞 見であるから流しては佛に濟 すと、その生活が全面的に踏 ます。との何を一讀いたしま 練された輕味の句なのであり て、そうではなく實によく洗 うに見えますが、決して決し らすら詠みつばなしの句のや と云ふのがあります。ただす あの帶は亡くなつた母の形 いたして居ります。そして

が、あのかれてゐるに近い意

てゐるといふことを申します

茶漬の味だとも云へますが、

例へば美食に飽いた人のお

なからうかと思ふのでありま 淡と云ふ言葉が一番適切では 味なのであります。つまり枯 含まれて居ないのでありま

りますが、川柳の輕味といふ

言葉には、そんな意味は全然

ぼい皮相な感じを表はして居 語となつて、いかにも、安ッ

す。よく、あの人の筆はかれ

持味を出してゐる點で頭の下 る何なのであります。 とよどみなく詠まれてゐて、 しかも汲めどもつきぬ枯淡な あり、洒脱であり、すらすら ないのであります。 從つて、輕味の句は輕快で

お茶漬階級のお茶漬の味では のと同じであります。

飯はよいものと氣のつく松

てある なぐさみに女房の意見聞い 松の内麻上下の袖だたみ

淋しいも秋おどろくも秋の

もない何のやうでありますが ふ感じがいたします。「なぐ 麻裃の句にいたしましても、 炯眼だと云はねばなりません と氣のつくことは何んの變哲 何であります。飯はよいもの たしかに金的を射られたと云 何れも古句であり、輕味の 進せず、徒らに川柳政治性に

見せないでも、その藝が光る す。老優が芝居らしい動きを ところの枯淡味なのでありま くな複雑なものを單純化 されるものではありません。 ます。同時に、そうした女房 に洗練を經て遂に完成し得た し、工夫に工夫を重ね、洗練 うした手腕は何人にでも賦興 にまかせきつて居ります。斯 前に投げ出して、讀者の思ひ るのであります。そしてこの 永い間の作句の苦勞が、いろ 作者の態度はすべてを讀者の らない亭主の肚裏もうなづけ ても、流さねば、どうにもな の言葉を聞くだけは聞いてゐ 劍な眼が感じられるのであり ら上の努力をなほざりにされ 易しと思はれるのか、それか るやうであります。 でもつて滿足し、川柳與みし 來るやうになりますと、それ の句の上乗なものが少しく出 でありますが、穿ちや可笑味 する以上は何人でも、そうし ではないのであります。川柳 者の持つ眼や感覺は全く尋常 と云へるのであります。何れ も、「淋しいも秋」の句にい た句境にまで進まなければ嘘 にいたしましても、輕味の作 充分にのみこんだ作家の句だ たしましても、軽味のコッを さみに」の句にいたしまして

れを一寸かぢり、これを一寸 家にして、はじめて到達し得 ち自分の句境に専念し得る作 う。輕味の何はどつちかと云 何事でも、うちこむと云ふこは寥々たるものであります。 の多い現代では、輕味の作家 られるのでありますから、あ かぢる所謂精神分裂症的作家 ついて少しく述べて見ませ へば、わき見をしない作家即 次に、現代句の輕味の句に

減らされて、投句家よりも遙 ましてそれんへのよさを鑑賞 ねばならないのであります。 のも、あまりに當然だと云は の向上が遅々として進まない の精進に目覺めなければ川柳 す。そうした人たちが作品 つけられて居るのでありま てゐるなさけない現狀を見せ に拙い句を作つてお茶を濁し 煩はされ、素質の優秀性を摺 ることといたします。 では輕昧の句を例示いたし

春雨に青さの續く竹梯子 月見草地球は丸いものらし 待ち合せ帽子の型を折り直

車屋と明治の話して別れ

ながら んどき 美しきに如かず子の鼻つま あはや庭へおちんとして子 一反は要るしとモンペ縫ひ 近況にかへて (円 路

そらく抜けない句であります あります。句會などでは、お ウッカリすると、見落す句で として水のやうであります。 「車屋と」の句の味は淡々 みことのり もやしがいちどに晴れた 開

でさへ、作家本來の使命に邁

す。大家と云はれてゐる作家 の生れる筈はないのでありま とがなければ名人肌式な作品

ます。 艶っぽさと、圓みと、甘さと であります。 作品を通してうなづかれるの に選りつつあつたやうであり 近年の句風は徐々に濃より淡 きて來た作家でありますが、 ちかと云へば濃厚な句境に生 が、その句風を支配し、どつ 内に育つたその環境から來た 地に近い島の内に生れ、島の 家をなして居り、大阪の歡樂 色の非常に豐な作家で、その 私はこの作者の句を二十年以 この作者は數年前までは郷土 上も選句いたして居ります。 の作家であることが、その ーカルな句に於ては既に一 そして今日では全く輕 奉戴いたしました一億國民の

るのは全く作者の手腕が然ら ります。「春雨に」の何も、 の青さを感受することが出來 きらかに川柳としての竹梯子 び込みそうでありますが、あ ましても「月見草」の句にい て難い味を出してゐるのであ すが、それでゐて仄かにも捨 ころのないやうな句でありま たしましても、一見とらえど 歩あやまれば俳句の畑へ飛 めるものであります。 「待ち合せ」の句にいたし 變は連戰連勝ではありました が、米英の接蔣行爲が國民の

しても實に輕い表現であり、 しかも少しのいや味もないと 「一反は」の句にいたしま りであります。 到る只一ト筋の道があるばか ります。これによつて觀ても 徒らに美辟魔駒を探し求める は全く敬服の外はないのであ とには行による枯淡な句境に 必要はないのであります。そ とめ得た至妙な手腕に至つて させてゐたのであります。そ 脳裡に一種のもやくを生じ の絕大な感激をこの一句にま にもやくが雲散霧消したそ みことのかによって、いちど れが十二月八日の宣戰布告の

とろに、作者の妙手であるこ とを立證してゐるではありま

「あはや庭へ」の

何

こころもちを代表した句だと 云へるのであります。支那事 十六年十二月八日に 大詔を して成功して居ると思ひます 然に盗れ出てゐて輕味の句と かず」の方が、親ごころが自 の句では後句の「美しきに如 けとることが出來るのではな なくても情景をハッキリとち 居りますが、この句は前書が にかへてと云ふ前書がついて いかと思はれます。この作者 「もやくが」の句は昭和 は近況 その道に入りながら、まこと ないと云ふのと同じで、折角 やれますが、眞劍勝負は出來 うと思ひます。とれでは、竹 に遺憾なことであります。 刀を持つて道場での試合なら ふ習性をつくられたのであら に題がなければ作れないと云 な題詠ばかりされてゐるうち ありますが、作者としてはと 者が負はねばならぬものでは す。尤もその罪の大牛は指導 られるからであると思ひま 雑吟に對する認識を缺いでゐ つかかり悪い雑詠よりも、樂 いたします。それは題詠吟と らも、時々そうした聲を耳に なら更も角、そうでない方か 方があります。極く初心の方 とどうも作れないと申される 川 柳を作るのに、 題がない

來ないと云ふ筈はないのであ 精進力があつたからでありま ら、題詠が出來て、雜詠が出 の力で、グン(作句したな す。川柳でもそうしたまこと ます。そこにはまことと云ふ 敵を斃したと云ふことであり 技量以上に實力を發揮して大 負になると反つて、道場での 維新の志士などは、眞劍勝

> 入ふことを少しく述べて見や の川柳の世界に這入れるかと ことが發揮出來るか。

を素直に寫して見るのも一策 しますと、會社の內部の情景 のない場合はどうするかと申 かなり句は拾へるものであり です。職域から何を拾つても ものです。しかし、モヤー ことがかなり强く流れてゐる は、その句の中には自分のま て來るモヤーであるからに とです。自分におしかぶさつ モヤーへを句に纏めて見るこ る方であれば、會社の内部の であります。會社に勤めてゐ 手近なところへ限をつけるの それには自分にとつて尤も

例へば

これでよいのです。 社長室只ウン(のいそが

重役の英語違つたまま通り

務員のことであらうとも、 課長のことであらうと、 て社長のことであらうと、 給仕や、タイピストや、女事 互ひ同士のことであらうとも に觸れ、心をうつものであれ とれでもよいのです。斯うし 、駄々坊) 眼

ホント そのま ば見たもの、感じたものを句 めて見ることです。そうすれ 何んでもかでも、

よいが、調子が思かつたりし ず作句の練習をしてゐないと ばならぬからであります。 とが出來なかつたり、詩想は ゐる詩想を充分に盛り込むこ はないために、自分の思つて イザと云ふ場合に、辭駒が整 してゐるのであります。絕え 詠と云ふことは作句の練習を 柳ではないのであります。 を捻り出すのではホントの川 りますから、題を出して、 句は作るのでなく生むのであ て、幽搔ゆい思ひをしなけれ 思ひます。むづかしく云へば にすると云ふ習性が出來ると その意味から、題詠は題

れるものです。 ることの生甲斐を感じさせら 邊雑詠の中には、なか

人拾 すめしたいのであります。身 詠よりも特に身邊雜詠をおす そこでそう云ふ人たちには題 役にもたたないのであります て難い住吟が生れて、 は、イザと云ふときに何んの ば竹刀でなければと云ふので で無視することは出來ない でありますが、道場でなけれ

身邊雜詠を作る人達の参考に 次に一二の實例をあげて、

宋朝は近衞首相に似た活字 の田さかさ見落す給料

けふの歴史を 生きる道 三人の智慧で讀めない伏せ インテルよコミようかぬが 害いてケース

はれたのであります。 れが斯うした何となつてあ てゐられるのであります。そ ふものに人一倍親しみを感じ であります。從つて活字と云 ふ新聞社の支配人兼廣告部長 作者は布哇の日布時事と云

少しく解説することにいたし を知らない人たちのために、 活字について、詳しいこと

アと云つて微笑を洩らされる すまい。ハハン、なるほどな との句は宋朝が判りさへすれ 神經衰弱だと呼んで居ります ります。私たちはこの活字を 句意を解説するには及びま られてゐる、肉細の少し背 ひよろ長い活字のことであ 種類で、 宋朝と云ふのは活字の字體 名刺などによく用

ととと思ひます。 八ポと云ふのは八ポイント活 次は「ハボ」でありますが

> それで大きさを想像していた と一寸一分の長さになります すと、一时の七十二分の一で ります。一ボイントと云ひま 示したものであります。ここ 字の略稱で、活字の大きさを 長さ九ポの活字を十字並べる の活字を十字並べると九分の のであります。つまり、八ポ 七十二分の九の大きさとなる 七十二分の八、九ポは一吋の ありますから、 ントだけ小さな活字なのであ ト活字、即ち略して九ポと呼 つて八ポは九ポよりも一ポイ んでゐる活字であります。 に見てゐられる活字が九ボイ 八ポは一吋 0 ます。

かに穿つてゐるのでほほえま な穿ちではありますが、 だきます。 される句であります。 を詠んだのであります。 の字のやうな活字になります さな活字でありますから、 でも氣づかないと云ふところ 八ポは右に述べたやうな小 給料日には氣持がワクワ てゐて、逆さになつてゐ 田

達筆に書い 稿を手にして一字一字を活字 るのでありますが、 の句であります。文撰が原 (ケース) 「三人の智慧で」の句は文 てあつて、 から拾ひあつめ あまりに どうし

させる方法を採ることもあり 組み、校正の時の注意を喚起 ります。伏せ字の場合、 根元の方を組んで置くのであ 字と云ふのは活字を逆にして であります。 ります。それを兩横の人に開 ても讀めない字があるのであ 合はせの文字を横に寝かせて して置くのであります。 いて見るが矢張り讀めないの そこで伏せ字に あり

の仕事をしてゐるのでありま 片影すら見せず、全く陰の舞 は白くなるのであります。 印刷された場合にはその部分 又は金属製の薄い板でありま 擴げたりするために狭む木製 しましても、印刷面にはその 字の字間を埋める活字體であ 字の行間の間隔をせばめたり 1 ンテルにしても、コミにいた つて、活字より背が低いので す。コミと云ふのは活字と活 ンテルと云ふのは活字と活 「インテルよ」の句にある 1

浮き上つて來て黑 インテルやコミが活字面まで うまく締まつてゐない場合に 道」のうくと云ふのは活字が ります。「うかぬが すが、それが、インテルやコ せようものなら大變なのであ ミの使命であつて、片影を見 い線となっ きる

> テルやコミに限りません。世 だから「うかぬが生きる道 であります。そこに穿ちがあ のすべてのものが、そうなの なのであります。これはイン て印刷されるのであります。

で、その函を幾つも並べたの るのであります。ケースと云 扱ひにしたところに興味があ ふのは活字を並べた函のこと 人法の句で活字を生きた人間 「今日の歴史を」の句は

官服を脱いは痩せをり患者。 かされる とたづね さうと聞き田舎に行かうか 急に來たものでせうかと訊 一寸ない病氣と聞かせ庸翳 警察病院風景 同 同 (湧 三)

作者は大阪警察病院の院長 同

それとうなづいて、田舎へ行 を一言一齣聞き漏らす筈がた 寸胸が悪いんだと云ふ風に T が尖つてゐるので醫者の言葉 かせれば、患者の方では神經 つた方がいいでせろかと質 いのでありますから、 矢を投げるのであります。 あります。 「そうと聞き」の句は、 すぐに

ります。この句から、地位と

云ひ名譽と云ふのも、

100

に附属した力に過ぎない

穿ちの何であります。 あります。醫者の何としては さは手のつけやうがないので るだけは聞かすが庸醫の悲し そこを摑んだのが、この句で 質に皮肉な句であります。

るのであります。

作

ケース棚であります。

理を摑んだ何であります。 かせるのであります。患者心 しいからで、 に訊くのはなんとなくおそろ ないと思ひまず。 と」と訊かすのは、 「急に來たもので 附添ひの者に訊 患者自身 せう

首を擡げてゐることも見遁 違ひないと云ふ小さな誇りが でない證據に診たてだけは間 ります。この何から、藪醫者 りますまいが凡醫のことであ せう。庸醫とは云ふまでもあ こんな句が出來たのでありま 者自身が庸醫でないだけに、

前では患者に過ぎないのであ 人の人間なのであり、醫者の 官服を脱げば痩せ細った一 てないのであります。 査でありますが、病ひには勝 につけてゐればいかめしい巡 肉な句であります。官服を身 會の裏をハッキリと見せた皮 「官服を脱げば」の句は社 一上度

「一寸ない病氣と聞

かせし

秋の夜長に忘れ物をした話を聴くこ時に、どんな忘れ方をするものか、

ては不可ないこととがある。どんな の中には忘れていいことと、忘れ

ととした(編輯局

今度ネ素敵なパナマ帽が特免 で賣り出されたのですが一寸

シート中島さんですか

島 生 k 庵

濱 田 久 米

쾵

雄

りに であつた。驛長襷を忘れて代 んどしに長しでありまして 獣がつどいて出た言葉は「ふ らなくなった際長に暫くの沈 話は順調に進んで行つて「帶 あり、その日の達示事項につ 上である。整列した二十人餘 に短し」の語句を使はねばな いて驛長の訓示が始まつた。 の驛員を前にして人員點呼が 出來事である。 綽名が奉られた。 或る驛、或 十年前、僕が勤めてゐた際 その日から「ふんどし 褌を持つて來たのであ る朝 點呼 の席

小切手 見捨て られ た

田

で鞄や帽子を忘れること一再 そんな事を憶えて居た日には けとは少々コクだ。一々一々 はせると、 に止まらず、これを家内に言 る本領ではないか。電車の中 を忘れて行くのが私の名人た 私は限りがない。むしろそれ 物忘 て「忘れ物をした話」を書 れと落し物の名人に向 私が電車の中で本

虎

どんな註釋をつける氣だう。 取引の解決がついてゐると思 僕は小切手を貰つたらそれで たま、一月も忘れてゐた事に かの小切手をガマグチに入れ つてその後の事を考へぬ。 んなら、貰つて來た九十何圓 を讀むからだそうである。

男はもう默つて云はれるまし

から昨夜はどうされたです」

大變な忘れもので、それ

て慇懃にそこを辟した。氣が に署名しやつと鞄を貰ひうけ

たと思つてゐましたがネー を捺したらそれで萬事解决し そうですかね私は判取帳は判 持歸らなかつたりといふ。 これは先月判取はして貰つた 金を考へ違へをしてゐるんだ やな!と思つてゐると、それ け落したとも想へぬ。不思議 バスの切符を切らす時十圓だ 中で買物はした覺えがないし うも く吳れるから突返すとルイヤ 先を訪ふと請求額より十圓多 れがどうです一月立つて得意 はキット家を出る時持出した る。鰤宅して勘定すると、ど と又家内が註釋をつける。 からいふシグサは外にもあ 十圓ほど金が足らぬ。 てある十圓はアンタは

> 男 0) わすれ

> > 撃でつけ

關急上六のお問合せ係で神妙 「きのふの生駒行の網棚に置 る男がゐた。「それはいつ」 に前夜の忘れものを訊いてゐ 長くも大東亞戦争の詔勅を たその日の朝であつた。

…」あつた (虎の子が。帽 が出る人もあつたらうと大頭 子のサイズにいつもなやまさ …」〇〇百貨店からの電話で た。丁度だつたらふと出來心 立つて拾ふ人もなく歸つて來 れる大頭がこんな時はお役に 忘れ物係へ。「これですか… め七分の未練で夕方驛長室の ら青くなつた。三分のあきら を電車の網棚に忘れたのだか つたと思ひ給へ。その虎の子 飛びつく様に大枚二十圓で買 なたには丁度い」のですが・・ 八十圓以上の代物ですよ、 てるんですが、時價で云へば サイズが大きいので賣れ残

を一寸撫でて見た。

6 Ξ に武 Ko 特設防護團が旋風のやろに忽 じないんですか」「あいさう のまく投げ出されてゐる。 られたらしい荷札をつけてそ ち行動を起したのである。 眼を開いた。その時だ、病院 でしたか」一瞬、男は豁然と すよ、けさのニュースを御存 佗びてゐた「到頭やつたんで 上には例の鞄が一 なく男の出勤をやきもきと待 方へ步を移した。 かなと思ひながら男は病院の に大童でゐる。また防空演習 つけば驛の構內は暗幕の準備 病院では事務長氏がいつに 恥を 曝すかの

これだけは遂に知らない。 だ。迂濶な日本人のたず一人 民
離として
襟を正したその朝 一つ忘れものをしない は以來謹慎今日に及び未だ何 である。 ねたことは何といつても不覺 眞珠灣攻略のその日だ。 (昭・一七・九・一七) 幸なことに敵國人も C 男

よ」「あっお階者さんでした 「聴診器などが入つてました 聞いてそこで一寸薄笑ひした 味は?」、係は心得額に疊み たか」「ありましたか」「中 き忘れました」「あゝ鞄でし

物忘 n 8 ころろ 3

須 豆 秋

たくし幼なかりし

頭の思 は尋

石 根 民 郎

むが、何處にドツコイショな ツコイショ」の話をしてせが ~」に變つて家に歸る。早 ョ」と云つてしまふ。少し足 來た。それを見て、やあ團子 頭をぶんなぐると忽ち瘤が出 ものか、莫迦野郎と馬鹿聟の んかを食はせるところがある 忘れてしまひ「ドツコイショ りない聟だから途端に團子を を跨いだ拍子に「ドツコイシ と、途中に滞があつて、それ 團子々々」と呟きながらゆく を忘れぬように、歸り道を「 もらはうと、團子といふ言葉 たので家へ歸つてから拵へて たところ、とても美味しかつ つて團子の御馳走にあ へてもらはうと思ひ「ド が親 類に招 れて行

れて「このやなぎをつげ、こ

ひました。

その次には柳の下

道風先生に見付けられてしま

枝が折れたのをキッチリ小野 きしてゐたところ、ボキッと してゐる一抱もある柳のみづ す。
豊休みの時間校庭に
蟠居

年生頃だつたと思ひま

(しい枝に飛びつき飛びつ

2 子だよ」といった。 母から聞かされたなつかしい 於ける民話で、幼い頃よく父 の馬鹿聟は持ち合せてゐた としては誠に恰好な考へを 噺である。ものを忘れぬ方 これは私たちの住む地方に しばらくして人柄らし

た」といふ忘れられん思ひ出

は泣き出してしまひました。

の枝を捧げ持つたまく蛙

これは

「忘れものにされ

きことがあるとある。それが 野郡上龍門村の俗信中のなか 類中一有」効とあり、奈良縣吉 者,七月七日取:蜘蛛網,置:衣 和漢三才圖會」に、有二人喜忘 含めたものとされてゐる。「 蛛が物忘れぬものとして、必 8 われくであつてもかくる間い馬脚を暴はじてしまふが、 こからまつはる俗信をたくさ 夜蜘蛛の縁起を盛り立て、そ かに入れると何かその日に良 には、朝蜘蛛をふところのな るのだといふしるしの意味を ず自分を忘れずに訪ふて下さ かねでしるしも」の歌は、 りさくがにの蜘蛛のふるまひ の悪さを仕出かすことはある ん作り上げてしまつた。 の相貌を判斷して、朝蜘蛛 人間の感能からいつしか蜘蛛 た「わがせこの來べき宵な のなのである。 衣通姫が詠 動和

には、 くれ行く船をしぞ思ふ」を唱 る。願ひがかなつたら「島か 翌朝起たい時刻に眼がさめ へることだ。これに關した古 就穣のとき唱へて祈念すると 石の浦の朝霧に」を三遍前夜 に起きるには「ほのんくと明 朝自分の起きたいと思ふ時 私の住む近くの北安景郡 思ふ時刻に限をさます 御承知 のでとくであ

北

JII

巢

みな寝忘れぬための俗間傳ふ と唱へる秘呪がある。これは あらば引き驚かせ我が枕神」 打ちとけて若しもまどろむ事 に「大」の字を三通り書き「 には、男なら左手女なら右手

する奇話、珍話の中には誠に く耳と關係があるのではない しばかり蒐めてあるが何れ綴 面白いものがあつて、私も少 れは迷信だ。しかし茗荷に關 み傳へてきてゐる俗信だがこ るといふ。隨分私たちが馴染 かとも思つてゐる。しかしは しないとある。私はなんとな 長く延ばしておくと物忘れを らしい。東京に、小指の爪を 見楽のためにこじつけたもの あるが、人間のせくこまし くと裕福になるといふ俗信が るくさんへである。 つて見たいと考へてゐる。 つきりしたことはいへない。 茗荷を食べると物忘れをす 小指の爪を長く延ばして

> 道を忘れ物取扱所へ急いだ。 草々さよならをして僕は僕

忘れてゐるのだ。もう城東線

へ一緒に乗換る所ではなく、

電 0

校庭に黄昏の色が足元から匐

やく思ひ出した毀は「その團 のような瘤だと叫ぶと、やう

つて終ひ、

ヒツソリ閉とした

鳴り…やがて先生も生徒も歸

授業の鐘が鳴り終業の鐘

ありませんでした。

の子には冷笑かされるし、

年生には笑はれるし、女

(風流どころの沙汰では

箱の上へ立たされました。 結びつけた柳の枝を持たされ らえてやる」と書いた短冊を

ひ上る頃ともなつて、

とうと

僕の場合も本線を降りて城東 なくなつてからの事が多い。 了つてもうどうにもしようが に氣が付くのは、電車が出て の網棚 へ物を忘れた事

沙汰な事に氣が付くとそれを アどうぞくなどといく気持 下衣類を一杯詰めた手提鞄、 時。歸省してゐた汗まみれの つた。時は八月〇日、午後三 線へ乗換へようとした瞬間だ になつてゐた後、フト手持無 る時にも彼に先を譲つて、さ た爲めであつた。電車を降 たので雑談に夢中になつてゐ 電車内で偶然近所の人と會

うかよく混んでゐる。此所を 儲けものだから、みんな儲け くりした氣持にならされて了 訪れる人は先を急がぬ人とて 々親切である。其の爲めかど た。そして品物をこまかに説 る氣持になるらしい。僕も家 ふ。忘れた物が全然なくても ないであらうが、誰でもゆつ 歸る事も忘れて順番を待つ 方がないのに若しもあれば 大阪驛の忘れ物取扱所は中

中のドアから入つて、 右側の網棚です」。 アイバーですか?」 「品物は何です?」 「前から二輛目 「手提鞄です」「皮です の車で、眞 向つて

れらしいのが

あると云ふ返

とは書いてありませんか」傍

それらしいなんて、

-It 川

新

秋

0

我

着

3

組

0

白

V.

大旦那 白髮染

餘技に絲瓜を

H

明

坊

根

は

正直に

伸びても ぶら下げる

僕はたまらなくなつて催促し

もまだ何とも云つて來ない。

時間が來た。十分程過ぎて

おもむろに電話をしてくれ

掛員は時計を見てから又

電話は暫く待たした後そ

時によく聞いておかなかつた ますが!」 す。色はブリューに塗つてゐ はあるまいと思つた。「豚で からである。まさか牛や馬で 僕は困つた。何の皮か買 何の皮です?」

皮です」

が〇〇へ着くにはまだ間があ 色の事も云はねば、 表を見して今の電車の終着驛 はおもむろに時計を見、時間 す」。僕は今思出した。掛員 云ふ事も云はない。 いてゐる事も前から二輛目と 云ふ事も云はず、エブ札の付 は傍で僕が聞いてゐたが鞄の 〇〇へ電話してくれた。電話 いたエブ札が付いて 「中味は?」 「衣類です。北川手荷物と 其の電車 何の皮と 浮んで來た。

付いてゐる。中味を調べられ 扱所を覗くと、 くたびれて、 に困つた。阪急百貨店を歩き 着かぬので、其の時間つぶし 0 何時の電車に積むからと云ふ から品物を見てくれと云ふ。 た僕はたまらなくなつて叫 で電話のやり取りを開 は見なかつた。僕は拇印を捺 ると困ると思つたが、中味迄 んと二時間前の色のまく棚に し、お辞儀をして僕の鞄を受 た。はじめて家の事が頭に 除り損した事は念頭になか ってゐる。北川のエブ札も が、まだ一時間程もせぬと つて歸途に就いた。 掛員は、とも角送り返す も一度忘れ物取 僕の鞄がちや いてね

忘れ物驛長室でお辭儀する

か」る時

淚

もろさ

0

美

台

休閑地

ニッポンモニホンニホンと名士老ひ こうしては居れぬ銃後にある仁義

べて貰ふ

頭の先ご足の

笑

尺

6

布をたくくは 裁ち違ひ

どうすればお氣に入っやらし

ん気気の 長

兵庫縣御影町

临

柳

秀

財産の

整理も

隅でおとなしく待つてゐた。

事にして電話は切 るので、着いたら調

歸途、 らず、 くなり、 る日天王寺の友人を尋ねての ら手近の靴屋で安物を買はう が時節柄よい品が仲々見つか かと思つて迷つていたが、或 一年程前の夏、 小さな靴屋の店の白靴 もうゴム底でもよいか 方々探がして歩いた 白靴がほし

> 旅先きで 病院で

妻の供養を

おこたらず

あるじ無き簞笥の艶の褪せしかも

宗良縣指田町

H

翠

梁

不思議な縁も

あるのなり

てしまつた。 し、これくとばかりに買つ ると純綿である。 が目についた。手に取つて見 底も本皮だ

5 で、一人では入つた。相變ら 度ビャホールが開いてねたの ルが空いたので、そこへ坐 かへりに千日前 た。冷たそうな大コップが 満員である。近くのテー 一出 た。 T

> 空けた。そこを出てから家へ ので、歌舞伎座の地下をのぞ 來る。テーブル かへるに、まだ少し早かつた 包を置いて、 かけつぎ二杯 の下の棚 へ靴

急に何か手持無沙汰なのに氣 がついて來た。アッ靴だ、 安全地帶に立つてゐた私が、 約二時間の後千日前 の市

きには入つた。

易 すぐ坐れた。始終右手で扇を てよ地下では案外すいて居て

テーブルの下だ。まだあるか 使つてゐた。左手は何も持 まだ女の子が椅子を片づけて ば本日ビール賣切の札をかけ ビヤホールだ。ビヤホールの て入口は閉つてゐた。中では てゐなかつた。ア、やつばり 知れぬぞ。といそいで行け

鮎 0 色 氷に乗つて 都 會 0 值

花持つて 戸の外は 朝 ゆくとこのある だ子の聲 鳥 足早 0

高 能 柳

兒

今日も無事 明治生れ

火た」き棒へ

蒼い空

明治の

唄

10 松

14

前

田

Ŧi. 健

は

足を

揉ませる 子があつ

T 木

鉛

否

眼をほそめ

よく書であるのに困るタイピスト

借 まだ物足らぬ まだ故郷へすね續 妻 楊 H

定

食 階

買ふ方に小錢がなくてどなられる 籠が要るほど 茄子が成 いらず 山口縣 虫が 原 狂 路

頭 鴻 時 計 聖 0 濫 麒 誰も 居ず 田 眉

ラミュラローとぼれるやう上擦れちがひ 眼 女 3 將 床屋あぶなし 癖がなほらぬ 站 乗ると 跳ね上り 0 支 世

丈

すがねえ」とは入つて行けば

ねたので「忘れ物をしたので

見知らぬ人の姿が浮んで來 子を一ツ宛のけて見てくれた パナマ帽等の山があつた。帽 何ンとそこにはカンカン帽、 ンターの上の戸棚を開ける。 りして置くのですが」とカウ いお忘れ物を見つけたらお預 無かつたやうですよ。たいて い。靴ですつて、そんな物は くれた「こちらへ來て下さ の子が忘れ物係の人に告げて うなものが置いてあつた。女 ば靴の包らしき物は無く、そ ブルでした。確かにこの下へ かわりにきたない雑巾のや かりの白靴です。此のテー 靴です、それも今日買つた どんな物ですか」と云ふ。 いたのです。と下をのぞけ とうく無かつた。同じ ブルで一緒にのんでゐた

ものか、たつた二杯の大コッ に、此の時ばかりはどうした 云つてはした事がなかつたの ば思ふほど残念で仕方がなか かりの、それも方々探がして つた。子供の時から忘れ物と やつと見つけた物を、と思へ いてねたら兎も角、買つたば たとへ一度でも二度でも履 餘程醉つたものと見え

先と頭の先の物を忘れた事に 來るかも知れない。 なる。此の次はその中間を取 間に合はない。これで、足の ひよつと氣がついたが、もう 來た。地下鐵の切符を買ふ時 つて、ふところの物を忘れて 車の網棚へパナマ帽を忘れて た時の馬鹿々々しさを感じ 點呼が濟んでの歸り、汽 とつくんく忘れものをし それから二年目の今年の

忘 れ B 0

だつた。 む と、〇〇さんは自分だつたの つた。とその瞬間に氣がつく (してゐる。 看護婦は已む 呼してゐる。誰も返事をしな を得ず次を呼んで入つてしま い。患者達は痛む眼に、うつ 「〇〇さん、〇〇さん」と連 つて數人の患者に、看護婦が いてゐた顔を上げてキョロ ある眼科醫院の待合室へ向

の時 に行つてゐたから、自分はそ りでなく頭迄悪いのではない るなんて、この男眼が悪い許 人の健康保健證を借りて診察 かと思うて下さるな。 みなさん!自分の名を忘れ 〇〇さんになつてゐた課 質は友

やれば、

悪童仲間でも幅がき

に角、スリルはあるし、巧く が輕いかも知れませんが、兎 かどうか。 を眼の悪い人達は知つてゐた それから間もなく、そこから である。正に天罰テキメン!! えるやうになくなつた自分

ンニン ガ

石

鹿

題を見ました處、〃天は助

くまくよと度胸をきめて、

問

なら苦しみもがく、地名も人 るものを助くいです。何時も 力

所謂カンニングです。まあ恣 その對策を教へてくれます。 對策はあるものです。先輩は 窮すれば通するの譬への通り 憫まされたものです。 ですが Ch ばい私にとつて、棒暗記を強 困るのは試験でした。忘れつ 満してゐる時代ですが、たど 坊をやるわけなんですが、流 生時代はたゞ樂しみだけで充 て朗らかな話があります。學 今想ひ出しても愉快な、そし たりなんかはまだい」として す。其の頃から物忘れの甚し かつた僕です。宿題を忘れた られた所謂暗記物には隨分 盛りの中學時代のことで 寄宿舎へ歸る時間を忘れ へば二十何年か前、 二十

易いのです。

きあげたのが、午前二時!!そ ろしい努力でした。それを書 コッくと書くは書くは、怖 針の先の様な細い小さな字で 克明に、豆の様なと云ふより めたのです。小さなカードに であるカンニングの準備を始 の試験勉强を濟ました午後の あた前夜です。

兎に角一通り 十時頃から、忘却の豫防注射 最初の日の西洋史を準備して やつたらうと決心したのは、 す。他人がやつとるのだ俺も とならざるを得なかつたので そのカンニングは大きな魁惑 三學期の大学を缺席した私に の初日でした。當時全國を荒 くと云ふので、一應は魅惑さ トつたのが、四年の學年試験 廻つた西班牙風邪に罹つて その魅力にか

でした。そして、その時昨夜 のカード 案用紙が配り終へられた途端 込んだ時は、試験の問題と答 狼狽てふためいて教室へ驅け て、朝飯も喰ふや喰はずや、 の夜更しですつかり寝坊をし ところが、その翌朝、 はとボケットに手を 昨夜

學生です。他人の句を燒き直 行となれば、そこは純情な中

た昔の川柳家よりは或は罪

炎込んだ所ありません。 々々しくなつて來ました。え 昨夜遅くまで、かくつて作つ 思ひ出したが後の祭りです。 部屋の机に忘れて來たことを たカードの苦心と努力が馬鹿

感謝せずにはゐられないので を知らずに今日迄來たことを カンニングをせずに濟み、そ してそれから後、カンニング カードを忘れたばかりに、

カードを不要にしてくれたの 恐ろしいまでの勉強が、その れば、カンニング準備の爲の けるじやありませんか。考へ 名も年號もスラくくと書

畑 自 有 浪

忘

れ物親子奇

のです。

分。これでよしと寝についた 瞥見術の習練をやること三十 る先輩日の秘傳に依るカード れから、カンニング名手であ

かして居ると、 と浮いている物にに、腰を拔 或る淀みの岸邊に、ぼつかり りとして居て、びつくり驚天 居た伴のことを、ついうつか !川下へしと走り續けて、 に夢中に成つて、連れて來て 小魚奴のなぶりくさる浮木 いつの間にか

お父うちやん、川へはまつて 後から駈けつけて來た仲が、 りしてさがしてたんやと、ほ つとした様に云つた。 しもうたんかと思うてびつく

長室まで Щ 文 Ξ

突き出してゐた折柄、驛のホ り換へて、ヤット座席にあり ッキに立ン坊をきめ込んだ。 に乗り込んで、福知山までデ ンスを始めるのであつた。 ームの擴聲器が大聲でアナウ 當もがなと汽車の窓から首を である。アイスクリームと辨 た。外は真晝のカンカン照り ついて、ホット一息ついてゐ の山陰線に城崎から無理押し とくで福知山線大阪行に乗 今年の夏、壽司詰め超滿昌

かつた。 なぞと、獨り苦笑を禁じ得な 氣な奴もあるもンだ。 コンナ ランクを忘れるなンて隨分否 のは極樂往生疑ひあるまい。 擴聲器は續いて一段弊高く 之を聞いた文三、大型のト たお方は………」 驛長室迄お越し下さい。 ランクをお忘れになつ

> てると ット我に歸つて耳をそばだ 小山文三さーん、小山文 三さーん居らつしやいま せんか、」

あつた。 は編知山に近い)再三、再四呼ぶ に冷汗に代る心地がするので b 大きいので、穴でもあれば入 のである。一面も其聲が馬鹿に 度い氣持で車中の汗が一度 「小山文三さーん、川邊郡 處もあらうに(文三の生國 の小山さーん。パナマ帽 長室迄お越し下さーい。」 が忘れてありました。

を確保して置こう。 風呂敷包を置いて、先取特權 た座席だ。としには手提鞄と 肚はきまつた。でも折角占め マ、よ帽子を貰ひに行こう! だ二十分の餘裕がある。よし 車に忘れてゐたのであつた。 乗換へた汽車の發車迄に未 鳴呼そうだパナマ帽は先の

トランクをお忘れになつ

たお方は御座いませんか

「アナタが小山さん。帽子 がありませんから困りま よかつたですナ……… コノ大型トランクは名札 ので呼んだンです。まア に名刺が入つて居ました

厚く失念を謝して席に戻つ 來ませんが………」 すよ。まだ誰れも取りに

てゐた。 田舎のお爺さんが平然と掛け 上げられ、其座席には頑丈な 包は御丁寧にも座席から棚に そして手提カバンと風呂敷

したのであつた。 半を超満員の立ン坊で家に歸 ないで、數時間の空腹を我慢 こなつたし、茶の一杯も否め つた。素より汽車辨も買ひそ 文三詮方なく、又々二時間

(昭・一七・九・一八稿)

膿症の病原菌克服作用を發揮す。

ンアミド側にして、内服により化

(十頁下段の織き)

ことを悟らされるのでありま

淋疾·婦人科化膿症

外傷化膿•丹毒•面疔

齒槽膿瘍。 眼

瞼

炎

中

耳

包蔵二〇錠・五〇錠・一〇〇錠 炎·扁桃腺炎

公園際店に有

とであります。 手近な身邊に、眼を向けるこ ないのであります。先づ尤も ないところから來る聲に過ぎ のは、全く作句の方法を知ら て雑詠が出來ないなどと云ふ のであります。誰でもそうす 初心者に限つたことではない を求めてこそ、ホントに力强 べきなのであります。漢とし ます。斯うした句の作り方は い句が生まれて來るのであり 斯うして、自分の身邊に句

製造元內製

東京·大阪

リッヂを渡つて驛長窓へと入

そして悠々とホームからブ

本劑は品質至純なる二基ズルフォ

痛・發熱等の症狀精退迅速にして 故に、患者の苦痛さする化膿・疼

短期間に根元的治癒を促進せしむ

柳



友達に 老兵の 戦ひの 雨の日は どうもいていろっになりますと軍事便 デング熱それから。蚊はつまみあ 世の中をきれいに見てる きてなほ 註、ダラガは比島語の娘 選 或る日グラガの眼に迷 私物の 忠靈の碑の 增 勇 俸 中化 貰 士 受くる ベビ ふ女 8 ぬる」日ぞ 秋 人つ 有難き 學 1 0 娘

南

愛媛大洲 同

歸還し

た足に柾目の

除

K

扇子の風は

たよりなし

からげた

奥

0

同

信心の

数字は咽喉に

ひつか

ムり

同

阪

木下

淚入

八(39

墨(52)

明月

を

仰げば

そとに

鶴

ケ

城

保健所の 役人さんも

風を

引

同

宇和島にて

當選のあれから留守がふえまし

んで

俗物が 米食の

b

話

から

多

世

滿ち足りた 氣持知つてる

妻揚子

次ぎに

子供へ

同

落伍する裸

0

人

社

長

な

6

時間が

すぎ

た

町に す

乘替への 1-7-をされたはきついエ 戀もなく 悪い所だけ似たと母へ が 頂 0 C 汽車の 鮮女の 今の 友のくらしが 看護婦南へ 行くと云 母大 H 通るを 本 知つてる 楯をつ 嬉しが 偲ばれ 大き過ぎ 1 ーイス b

阪

丸尾

大 同

阪

森川

九一

長泣生きく酔

三(53 誓(50 為(18 至(51 哭(64 型(47

至(45)

森田カズエ

腰內

売(53)

一公(16)

(公) 西(53

驚いた事には藁屋から第九 電話室から香水の娘 0 紐 解けて 生れて 築 がスツト出 VC 金 銀と化 シンフオコ iff

阪

橋本美奈子

らせて 母: 弱い 父だが モンペは胸へ 南から來た こわい 風を入 德島縣

感傷をさらりと海にすて、ジ といろよし ヘルメツ ヤワ 大牟田 上村十四之

阪 有馬

干斗

人吞生入內入二投寢馴吞納逃慰荷 學 階挿 み げ 造 氣氣 試證學借し顏染直札腰めり 殿四 (45 間(54 图(45 到O(32 元(43 天(61 元(35 三(33 高(36 11(22

灵(50) 11回(32) (54

高(34 望(57 九(10 16 2年(18) 贸(55) (12)

名古屋

MM 前田

秋幕

仲

同

高橋

六(13 1(10

すのである。 下の日本數字は「川柳錐誌」の號數 の配列はすべてABC順、題の 六ページに仲人の句があることを示 とあるは第一號(第一卷二月號)第 表ページ敷、例 で、算用數字は其の號にある題の發 ▼間の配列はすべてABC順、 柳畔誌自一號至二一五號 へば、仲人一一16

柳川 類 題 索 31 (5

THE WAR WITH THE WAR T

社の恥歸 國 今日 ネ 鰯 鐵道省 碁 冷 砂 蒙古風 ワ П 軍 父さんの 力 九時 チャラルで來る 溜息も 松の 代筆屋 傅言も クタ かけた 民 0 2 . 圃 靜 1 鐘 起 笛 事 E 血から嬉 5 あるを誰 る世に F. からは 影 ザ 兵 を けけ を を他 H 45 1 3 3 1 は 便 7 つきませうバラ 1 大き 步 吹けば内地が です は き ス を 無理も平 るらし 冷えた壁へ スへ 額 後を整 女 はもう知つて 召 包 湖 歩く苦心がう 交 兄 かり 人に 5 しく汽車を見て吳 吉 を ても 外 あまりに風は強かり 0 内 虎造 3 支那そばは ٤ T Ch から 10 弟 い景色に 知 换 世 が弱いのう」と祖 種遺産は 踏 机 豫期し さら 夢 田 い手 らな 大き ば 理 話 喧 鷄には 船 が んで 氣で 舍 る を ・まだ 胸 0 あ 付 H 隣保は忙し 0 引 0 い遺見を抱 姿 が な 16 る る 灯がともり て生れた みとれ 眼 で釣銭を臭む る の花でさ 1 ゐた語學 樓 腰 忘 兵に 返事 二十 かい 天 き 程 龍 注 有 4 海 にうつ 勝 ス を 5 礼 108 To b てく が出 戾 E H 文 凉 水 T 似 折 は を たり n 3 餘 四 寺 12 カコ 僕 80 丸 六 4 時 着 母: 尼 同 松 同 神 同 同 靑 同 同 同 西 大 松 東 同 臺 大 同 張家口 同 和歌山 松 同 崎 T 戸 島 鯡 宫 阪 江 京 中 阪 江 恒松 谷口 湯淺小城子 菖蒲 村野東狂子 岡崎 辻 高山 内田 杉生 本庄 秋月 好 正 叮紅 榮城 群月 土館 武士 掬夫 純子 稔民 宏方 75 暑 夏 旗を出 靴ぬげ 機關手 お 故郷の 自轉車 出 貨車の驛 湯 子を借り 友情が 故鄉 H 逆 嫁き遅 電 芽出度も 戦友の一人は 三 獨 瘦 の丸 V 僧 屋 0 貧 境 缇 + をワ 身 5 何 撲 0 00 休 す は から K れそ 0 を C 0 な 6 氣 姉秋子の新盆に寄す 0 为 から 包 0 を 乗れる産婆をたのんで 1 30 み い暮しで T 交換 靴になれたる 出 父 雜穀の 立ては淋し 0 男 拾 涙を ひみじ 勇士 Ħ 道 3 U 命 ヤバ П 來て れ 本 を T T 3 礼 ヤツ 人 0 實にし 聖 あず でも 理 フ 6 來 間 柳 知らず 一の家に 船 ば 若 継を 4 道 待 ٠ 目 お顔 だつ こぼれ 抜けた 誌に 才 る智慧を 書 知つ わか 動 女 ス は 病 0 5 き から 母: 高 カン てる 知る 7 圣 助 7 K トさ茶ツ た 4 3 他 父 5 宝 夢 る す 園 トラが近 子が 母: 子 二旬 な 手 煙草吸 足 姉に似 帶 目 < 日 廻 を る氣 靜 程 2 嫁 めて が 10 女 面 6 女持 放 つて が當 おく に痛 かなり に病 き遅 0 0 九 歷 な 事 白 さず 生 浮 13 7 刑 1 紐 右 る 服 b 礼 3 居 務 同 大 金 大 同 大 同 大 同 同 兵庫縣 大 大 同 同 大 大 大 同 大 同 京 阪 澤 颐 阪 阪 阪 阪 阪 阪 阪 雄 阪 都 中北 森本 入口 新川 树岡 松岡 松村 清水す 丸尾 丸本 今西 富川 正朗 博也 华 眞星 輝子 春池

名のナ惱握ぬ寢寢呪逃入咽 婆ろボ りけ返 の睨はける 女 大 白恩啞 女 夏夏乘入 仲伸 入朓拔 一等後 0 休知知院 殘 好 男 粉 子 b レみ け b 營め足 家三三(2) 函一路(19 オン一些(20 1111(32 1 (31 10人(33 10H(100 (c) (c) 1011(23 101(21 101(22 011(19 高(17 100(22 一公(15 兄(32 元(19 些(20 次(16 三(54 吴(15 九(22 查(18 九一(24 0 九(16 公(19 九九(16 八(19 公(16 八(20 六(13 八(17 八(17 全(15 (32 九一(23 八二(16 八0(18 実(4 5 1 一只(31 10回(37 垩 贸(53 哭(63 國(53 元(1 公(17 些(16 49 1

All Control of the second

秋の夜へ 凱旋 Ш 轉入の患者うるさ 飛ぶ 病人の 住友の 夕空へ 立ちつくしてる 御無沙汰 虫も泣 代 夏精せを 老 切符賣るやうに煙草を突き出さ 驛 ばななのてんぶら大阪を すつばりとくれる形見はほしくぞ 海へ來て海のかほりへ 痴人今日 きりぎり 廻れ右すれば 赤いネクタイして嫌はれる年にな 0 丽 .患. 長 計 筆 濯 奥 車 1 ほどの氣力もなくて梅は老 0 は 平 VC 0 0 掌 が け は 徵兵檢查第一乙合格 MC 大宰府參詣 熱がみとり ビルを 白 子澤山 今日一日の 朝 す 腕 0 0 出張兵書も ダリアを抱 同 去年の 胸ボ 今出すかねの 上手で知れた 間 衣 夫婦喧 卷 大きい丈の 鮮 友は南の の有る貯 10 で ケット 痛 祖 足 將 時 二旬 らし 百 今 國 ま 場 計 棋 一 を 枚 は 程 いて哀れなり 夜 K 入れ 智慧を貸 VC はて まだ若か 2 おぼえたり 金帳なが さむくさ 出 カ 仕 又 K 扇子 背になり + 憶 車 右 中 皺を延べ 雀 ふと思ひ な た と知 に居る 事を て行 で啼 2 へ做 汚 訊 0 0 3 疲 チ性 さし き 窓 子 き L 月 خک き Ch 世 同 和歌山 同 朝 同 同 朝 同 朝 大年田 大牟田 同 同 同 同 璺 同 大 南 大 同 奈 津 尼 鮮 阪 派 阪 中 鮮 鮮 鮮 良 Ш 崎 日高 北垣 嘉部造林子 殿永 川岡 三輪 上田丸太極 德永林業子 濱本 粟井 松岡 大森風來子 奥村正太郎 上田柳戀子 吞鼬 晶平 風情 丘潭 那夫 蛙柳 アル 遺家族 影法師 蚊帳の 蠅叩く 足早に 献 蔣介 印度兵 正座し 圓滿な 隊長へ 國 巡査には警部がなんだではすます 小さい手に大きな戦果描 筒切りの 點呼すんで急に煙草が懲しくなり 檢 華僑と云ふ 放 命 本伏せた様な 策 H 牧 發 組 心 金 札 1º は n 石 地 ムも 歸 越 下 0 て二本の脚をも 0 愛機を焼いた K 亡妻一週忌 0 モ 中 音 大橋二飛曹の父舊知なれば 八月下旬修養講習會に参加して 顔そのまり 八日と 迫力で E る 活字に 給仕 内職今日も 部落は 役 境 竹 車 音聞きなが I 三男一女 英 16 < べいべ 埃の 女 稼ぎ息子を п をし 掌 手心 为言 皇族は 家 同 白 であつ I. 嚴 ケッを提げたまま まる 再 志も 飢ゑた 宿舍 は 根 近 地 衣 た VC 丈け 父 VC 平家蟹のやう 婚 ち 瓜 0 K VC 子 5 0 負けて た ととを詫 はげ 召され 眼をつむり 0 步 いて 友ら 事を知 蔣無く 8 つらひ を 足 慰 日 煙 を 7 供 哨立 まさ が續 月凉 週 狹 問 草 ほ 餘 知 あ 征く る 80 + 文 か き 盆 藏 同 大 同 大 同 朝 名古屋 同 島根縣 同 愛媛縣 同 背 同 神 同 諏 京 同 滿 朝 同 大 阪 阪 鮮 洲 洲 屋 戸 訪 都 阪 鮮 牧浦 喜多猪二 松田 西垣 中原 南川 华山 小坂ふじ畑 八田 佐伯 山本 八幡 弘津 岸本 幸 房 雞城 鎖 勿來 悟志 郎 往お置大押大 茶去 診ひり入賣人 男應お起き 親接福拔 女恩思 男臆 置お親岡恩應面曜お大思お往 手轉不惚 紙婆孝れ師召影るり縛つ様復 恩 男踊男俠奧大 の子病 ひ出 幽聲 主 け栗(47 き三(54 き一个(17 查(48 五三(4379) 登(24) 七0(34 党(54 八0(23 豐(53 至0(56 門(66 型(44 哭(50 九(17 公(17 八(18 心(15 公(16 全(16 全(14 金(15 公(13 今(14 八二(17 **売(51** 要(49 金(17 為(16 2(24 九0(21) 金(16 个(17 公(33 売(53 兲(43 上(24 西(16 1011(22 10年(30) 一公(15) 一011(19) 1011(19) 天(41 九0(23) 2(21)

朝

0

操

10

娘

ち

大 西 大 大 大 大 大 大 大 大

最 娛

花と散る

首

書

产

碊

石川ひさみ

慰

問

文

讀まされて 覺悟で

ゐる

古多

兵

阪 阪 阪 阪 阪 阪

大陸

五郎

-= 暑

泳ぎもう

沖

のボ

1

1

を見つけて

=

2 7

X. V

7 ス 旗

ト彼氏の前もはばからず

16

5

人生につ

カコ

T

利美

敎

獨

勳

牽

0 街

代

b

K

刀

が

欲し

5 立

JII

伊古田伊太古

大

阪 П 阪

泉

男

0

保

險

П

中

すなり 人上

長

男

H

生

ンド

×

ツク片手ずいき。芋を

だ

H

でフィルム一千二

百

尺

朝

鮮

加川

地 想 長

藏會

さな娘等と

尼 大 下

像

0

餘

b

K

小さ

き

詩 圓

0

顏

阪 翮

取る日の中ネマにて

資塚まで

お湯に行くをうらやまれ

兵庫縣

タコ配だねと

稅務吏員

笑つとき

大 大

觀艦に行くぞノツクス

潜

水

愛と言ふ

言葉を知つて

容子

する

阪

宮本加津枝

幸郎

灰山幾太郎

生

休

大

眼の色

あはて

ム言葉 泣.

カン 4

一云ひ

大地

征

女

は

かず

别 へて

れて

尾原

重役も

員も來てる

+

水

1

雨

錬 生 敗

裹

打

入

姿

が

凉

h

でゐ

阪

遺物を 靴と時計で 纏まらぬ心に 挨 # 日 チャーチルを 英 とうろ 人居にあれど浴衣の身だし 一々励む 拶 = 風 顯 8 機 0 き 時 家をめぐり 社長の髪の 夜業の汗を 髪の長さが 型にはまつ 手 慰問をつじる暇を得 つ氣で差し 何 とさびし K 旗 通 勤 から T T うす 見 邪魔に た 5 王手飛 渦 戾 世 虫 T まけ 幸福 つて 話 0 なみ ととこ 戾 なり 來 カコ る h 車 整 比島派遣 同 名古屋 丰 同 同 同 同 帔

名古屋 F 阜 平川 松井 市川 周峰 久枝 聖子

枕 當

は 英語とは づされる看板 板 4 别 思へ 0 仕 どバ 事 若 0 ス 且 大 から 那 0 き 言ひ易し 力 過 ×

看

美馬

覺史

0

中

が

わ

カン

b

0

夢も見ず

大

阪

伊田無哲坊

ラ ぎ

丕

大 大 香川 阪 阪 早馬 富田 松村

戒管制下

繃帶 手術迄 待ちわ きまぐれで 童心に還つて いとも あがり 活 月 悪 立 育 成 戰 活 戰 閑 選 元 を 會 兵 運 0 塔 E K 0 0 果 地 び を K ンべつたない手 薄 し退院なれ 場合 バ 言はず汗拭く ただ安かれと ますやさしい 裏 なくだんが 裏をちらりと 軍 服 噸 な タア 艦 先にあげる あ 暴動等と呼 諸 數 覗 ~ 71 b 親 ン半島 小庭が 殿 靴 昌 海 避 3 類 チ あ どき C る 0 は 難 汽 北 b ん。切手買 たよるなり 幕 手を合 女醫の 夢 連 袋 ぶま 古 女 只 車 高 花 たさび 婦 つきなり 續 子 2 見 も出 の寢 出 學 着 青 な 7 來 店 生 指 線 世 3 窓 會 息 大牟田 滿 大 岡 大 大 大 大 神 朝 尼 牖 大 大 大 大 華 大 大 阪 Ш 阪 阪 阪 貪 鮮 阪 崎 島 阪 阪 阪 阪 月 阪 阪 自記 西垣 野崎 甲製 金浦 西岡 藤本 田淵 米田 電原 大山 水田六龍子 齋藤 藤森小雅子 中西 畑 山田青々子 清柳坊

島田

1011(17

1011(19

來留臨理利老口老理兩樂立留歷理樂露

富田

ス一九二(18

公(18 公(17 公(17 临 浪零旅留諒 恪老流族落 月 行學閣 氣入行毀籍

ぼち袋 10014 要(46) 0(10

九(19)

男大横男温親 原 盛 前女着り情分 一三(3 111(31 000)[[[[10回(35 10至(36 先(20

三(336 1次0(38 至(30 児(69 要(48 至(56 哭(53 图(52 四(45 10(36 图(59 四(35 三(23 11(22 四(21 為(15) 型(45

8 C) EO

五(5

0

至(46

全(14

売(50

美(46

查(56

八(19

一號死下以——

後一金(19

1



#

廓のきなく」から

腕のきなく腎薬にはならず 古 旬

既に川柳子に詠まれる程普及 調べてゐないが、天保の世は 日本に輸入された時期をよく なからうが、私は此のキナが の秀句である事に誰も異議は 効薬としてやかましい幾那と してゐた事を見ると興味深い 來な來な」と現代マラリヤ特 この句は 句意は無論廓の唄の囃「 天保の 16 のであ

> リヤに用ふる。 り出して、解熱劑、

きなきなと蘭醫も晒落る柳橋 古旬

が處方した、當時としてはよ ほど新らしい輸入薬品であつ 屋にひさぐものでなく、蘭醫 所謂草根木皮として普く生薬 こしに南醫とある事は、世の これも天保の句であるが、

質問を發すると、 大東亞戰のさなかに、斯様な とさへ想像されるのである。 素人でなかつたのではないか つた人も、醫藥に就ては全然 た事が察せられ、此の句を作 立入つてお傳へしやうと思ふ 般の常識から少しばかり深く ねばならない。がとくには一 人としての常識の缺如を笑は キナキナとは何であるか。 今日の日本

じて用ひ、今も少しはそうす

鹽酸キ

ニーネ、硫酸キニーネ等を造 るが、その大部分は、

特にマラ

では相變らず僅かな天然品

や、 から、米國あたりではこれを 界中で騒ぎたてる程の代物で テリヤ血清などの如くマラリ の手を加へたのであるが、今 H が今度の戦争で既に機定を終 ある。その世界の九十%まで ヤに對する特効薬として、世 つた東印度で産するのである キナは黴毒に對する六〇六 本へ渡すまいとして、封鎖 ヂフテリヤに對するヂフ 逆に日本から封じられて され 恵り、西洋人には不治の病と シスカがリマ市でマラリヤに ンコン伯夫人ドーナ・フラン た。一六三八年ペルー總督シ スペイン人には知ら 六三〇年以前もう南米植民の

れてゐ

思へば笑止千萬である。 ヒステリックになつてゐる。 の防衛すらこれなくてはと、 殊に瘴氣甚だしいパナマ運河 キナは最初キナ樹の皮を煎

處で發見されたかといふと、 知られてゐたらしく。 キナと稱してよほど古くから 南米ペルーの土人間にはキナ たしかな歴史は明からないが では此のキナ皮は何時、 西紀 何

みである。

所となったもので、これだけ 九十%は我が日本の掌握する があるばかり、世界需用量の

でも大東亞共築圏の大きな弱

ルーゴに贈られ、デエスイツ で治つたのである。 又各方面へ布教の具に供しつ ト派ではこれを歐洲 成功し、 の困難の末蘭領印度の栽培に れ、英蘭人等の努力で、幾多 ルカロイドの含量の比較がさ れるやら、 世界の植物戸籍名簿に登錄さ み茜草科にシンコナ屬を設け て、前記シンコン伯の名に因 れ、大植物學者リンネによつ され、キナ樹も四五種發見さ は持來つたかも知れない。 教派が入り込んでゐるから或 (傳へたので、 者達の手にかいつて種々研究 のヂエスイツト その後キナ皮は歐洲の科學 今では原産地のベル 同屬中のキナ、ア 日本へも此の それが舊 にも傳

用 も强壯劑として、キナ皮煎を 成らず」から見ても、 が、「廓のきなきな腎薬には はこゝでは强壯劑としての用 途しか見えて居ない。 言はずとも腎虚薬で、キナ皮 ところで、 ひ、製劑にもキニーネ鐵丸 前述の句に戻 現在で 腎薬は 3

なんしろ七八種の雑草がお伴

をして來たものである。

種、テンツキ、

センボンヤリ

ユ、ギボウシ、カヤツリの一

等々がある。 ブドー 知られてゐるものではキナ鐵 來してからも、多く强壯劑と される、こんな風で日本へ渡 のものが數種あつて養毛劑に 水中何々キニーネといふ種類 はどとまで理解されてゐたか ての役目を務めたのが主で 酒、キナ・ブルトー 即ちマラリヤ療法に 又、フケとり香 のもの、俗間

草 0

ある。

私達の寡聞では知れたことで

ザンスミレといふスミレの 越えをして、 野寺から室生寺を經 植物採取の砂り、 此の一塊の山のカケラにはな 取上げられた。 しよに、 すと地面が軟いので苔類と一 種を見附けて一株大切に掘起 ショウジョウバカマ、イヌビ んと、前記エイザンスミレに 一塊の土くれとして掌の中に (着いて來たナと見ると、 種々の雑草が交つて 月、 榛原へ出る間 大和の宇陀郡 ホ、ー、いろ 路傍にエイ て佛隆寺

大和なる宇陀の山の一とかけら 雑草ぐるみ持闘り來し

てゐたのが、このキナ

鼠……でもない

様な音である。

叉た搔き立てる でも撫でる様な

「ハテナ……」

細い針金で戸樋 様な音がする。 な金属の觸れる をさますと微か

夜半にフト眼

H

ると、又た聞へる、……そろ

を照らすと同時に木劍で、 泥棒なら、戸をあけて、電燈

田

車

懐中電燈で照らして見たが異

耳は鋭く冴へて、 さうでない、次の間、

あちら、

音は暗黑の底から、

らしい、

二分、三分……豪所へ出る、

耳を澄ます一分

安ら

書齋と

床の間、慶所、

椽側を

むつくり起き上り、押入れ、

へ、これも違ふ、

様の下

氣になるので、 風……でもない

生々としてこ、徑五寸の土壌の強い連中のこと、て、皆々 乳鉢の破損した徑五寸ほどな その事、苔ぐるみ持歸つてと を、吾等の共榮圏として根を てやつて居た處、何がさて根 ものに移植して數日水をかけ 路傍に拾るにしのびず、いつ お伴の衆、要らぬものとても 更も角、せつかく着いて來た れでは歌にならないか。

爭はあるはず。 擴げやうとするのは、 見つけても根を張らう、葉を 日光を吸はう、僅かな餘地を あるものは他の葉の上に己れ でせり合つてゐるけれども、 くは見えない。 るが、人間達の爭ほど見苦し ある點に不思議はないのであ の葉を載せたり、 併し彼等にもやはり生存競 少しでも多く 各自が狭い處 薬と葉の極 生物で

> 恨み、叫びはせず自ら他と共 であるが、彼等は他を罵り、 したり、それはやくこしい狀 えて、ほ、笑ましい。 に生を樂んでゐるかの様に見 めて狭苦しい間に花莖を拔出

ものがあつて、 行くべき一年中の時期といふ 莖葉を收めて根だけで生きて し、開花し、結實し、地上の な覇権者がない彼等には繁茂 然り彼等の世界には決定的 ある者は今我

やがて事終れば他に場所を護 が世の春と繁茂してゐるが、 くの人種を包蔵する吾が共榮 てゆく狀態を見ると、 圏として種々な雑草が生存し である。徑五寸の土壌を共榮 的覇権を通さうとはしないの 人種を顧ることを知らぬ米英 顔にのさばつて己れら以外の つて退く。 此の點世界を我物 今日多

られるものがある。 圏をも思ひ合し、何だか教

躇しないのであるが、彼等は

こぬいて膺懲することに、躊

境であることを祝福してやり 幸にも共甘同苦を心得た平和 もあれば、容赦なく私は引つ 振りを發揮するものが一つで 草鉢中にも、不心得な覇權者 い、共存共築である。私の雜

しな

とくは家族達の寢息で、 の鷺歩きで次の間へ辷り込む 突き當らぬやうに、慎々重々 斷行と朱入の彫刻がある、古 き寄せ、手さぐりで、 少々鼻を高くする氣持ちも大 りと起き上り、家人には知ら かな夢の世界である。……闇 い傳來の木劍を、じつと握り の木劍……この木劍には熟慮 いにあつて……懐中電燈を引 たら、これくであつたと、 さず正體を見届け、夜が明け しめた。足音を忍ばせ、 床の間 物に

> い蟹が製匹 奉天に住め 泡を吹 いて居た。 ば

ちら、

內、

……その

間

そろりと、

間

降り

3

交

た音が途絶へる、戸外かな、

音が途切れると、感付かれた

か、とも思ひ、息を詰めて居

く旁々ロシア婦人への通譯も のが來てこれも花を買ふらし あかない。其處へ姑娘らしい 押し問答をして居たがらちが が勿論判らないのでとやかく 判らないしニイヤもロシア語 ニイヤのしやべる瀬語がよく 居る)が買ふつもりらしいが 婦人(ロシア人は澤山奉夫に ないながら) であつたので= かねた、それが日本語 が切花を賣つて居た。ロシア でニイヤ(日本呼び)

すると、又た音がして來た。 …へ見當つけたが、遠ふ、押 忙てず騒がず捜した。天井… 覺を、銳くし、方向をじつと けてやるぞ、眞暗の中で、聽 コトリ、カサく、 横になる……カタリ…… 自問、自答し して居るのかも知れないと、 とも持病の血壓で何か感違ひ 狀はない。 「ヨーシ」今度はきつと見屆 耳の錯覺 て、 元の通り、 しばらく

ろして、近よる、正に心氣力 つて行くとて捕へた、爪の赤 劍の柄を握りしめる、 ……見當は、ついたツ、電燈 する、耳と眼を闇へ一線二線 音と妙な、つぶやく様な聲も の戸詰の手で、……など、 突き……それも强いと怪俄さ の廢品釣瓶の中へ子供が學校 木劍を構へると……トタン製 一致……パット電燈で照らし のスヰッチへ指をあて」、 たく音が、金屬線の觸れる の中で策戦して居ると……し く……然し、怪俄する。居合 せては、いけない、軽く、 何やらの標本とか参考に持 息をこ 突 語の實際の縮岡である。 判りうまく商賣が出來たので イヤにもロシア婦人にもよく 國際語としての日本

孤篷 葭 乃 丹路 . . 豆 秋

丹路=此句は説明も批評も共 右の手をにゆーと伸して (かほる)

石鹿=栖風の畵のやうな感じ 人何といふものはさう云つた に近寄り憎い句です。 然しい くやうですが、よく會ふので れなかつたのですが、偶に作 す。今まで、かほるさんには すが、さう云うとわたしも行 連れてよく動物関へゆかれま 豆秋=かほるさんはお子達を つてからいふ傑作を創られる 物の句が殆んど見受けら

がします。

もんでせう。

3000 ですってある。その擬人法なかわからぬわけですが、かほるさんは「手」と云ひ切つてるさんは「手」と云ひ切つてある。その擬人法なりですが、かほりまってある。 ます。 丹路 =寫生句と云ふものは、 ないと思ひます。 野心があつてはいく句が出來

だらうと思ひます。虎の威權 ゐない所がい」のだと思ひま といふものが一つも損はれて のないところが此句のねうち 香 =簡單な表現ながら技巧

足は、矢つ張り「手」といふ

石鹿=然し虎やら熊やらの前

擬人法に感心いたしま

言葉を使つた方がぴつたりく

を呼び 脱ぎしぶる娘に醫者は次 富 由

「手」といふ感じはてんでし

ないと思ひます。馬や牛では

だから擬人法でも何でも

打水のしてあるとこが内 此の時一笑氏出席

石鹿=私は數日前に朝鮮から ゆくといふ所を表はすのに、 ゆるものを何處までも持つて れても、壁と味噌汁と神棚と 地人と云ふものは故國をはな きりと表してゐる點で面白 出したわけですが、「打水 ろに思ひます。それで問題を 關係の句がいつもより多いや とを拜見してゐますと、朝鮮 で「川柳塔」と「近作柳樽 歸つて参りましたので、其眼 藝者と、さうしたありとあら いと思ひます。〈表現のよしあ の句は内地人の國民性をは と反對に普天さの句に、 ると思ふんであります。 のは確かに川柳眼のお蔭であ しは別にさせて頂きます。そして内 主が「打水」をつかまへた

ほるさんの句作態度が覗はれ といふのは、亂作をしないか

日本に慣れて半島人の下

職業意識しかないお醫者さん ほんとに客觀的に鑑賞すれば

す。此の句は「脱ぎしぶる の冷たい感じがよく出てゐま

者の冷たい職業意識を表した 娘」を背景にして徹頭徹尾醫

本來の狙ひ所であります。 句だと思ふ。それが此の句の 丹路=「脱ぎしぶる」の句

事をまだ覺えて居たのかい相槌を打つては『そんな時の **める。いつも母や姉の昔噺に幼い時のことをよく記憶して** な』と皆んなを驚かせること は自分でも不思議なほど

羨ましかつた。 何となく子供心に腹立しく、 やんに添乳して寝てゐるのが に來てゐた。產後の母が赤ち お婆さん(母の母)が世話をし のことである。耳の遠い私の る。三ッ違ひだから四歳の時 がある。 とを割合ハッキリと覺えてゐ 私の次の妹が生れた時 のと

もうても何時までも抱いたま かはりにお婆さんが、それは (やさしく抱いて行つてさ つき出してゐるので、 てくれた。小便が濟んでし へ母はつれて行つてくれず 夜中に小便をしに起きても

とまだつき出してゐる。 ひにとう~~泣出してしもう 婆さんには仲々きてえず、 と二三度云つても耳の遠い 「もうえ」 「早うせえ」 しま お

こらず、盆々やさしく けれどもお婆さんは少しもお ながら落ちるほどあばれた。 『あら早うせえやア』 懸命にもうえーを繰返し

聞きかねて『もうえ、と云う

と云ふ。座敷で腹てゐた母

かはれ」、と父に云ふ聲がし とるんじやと云うて上げてつ

耳元で た。 父が則へ來て、 お婆さん

「もうえ」と云うとる h

である。 婆さんの憶ひ出は唯それだけ と私はやつとおろされた。お と云つた。『あ」そうかい

冊を長くつなぎ合はせて鰻幟 を持つて遊ぶのが村の習慣で と云ふものをこしらへ、これ ことであつた。七夕様をお祭 妹が三ツ、私が六ツの時

物置から鍬を出して來た。 年五月幟を立てる門口の空地 尺ほどの竹の尖につけて、毎 へ立てやうと思ひつき、裏 私はこの鰻のぼりを長さ六 けれど、

丸太棒氏

性の相違はよく出てゐると思

ますっ

又、一寸句が變り

生

か、或は妬かれるのか、

と多少關係があるので、

白く拜見しましたが、

します。

一=私も商賣柄、

半島の

狐淫 すが。 葭乃

同感です。

秋

=これは断然女同

志で

からうかと思はれます。

が日本文化の上に一つの大き な課題ぢやなからうか、

丹路

=ひとり言と違ひます

カン

=私は女同志やと思ひま

使命を持つてゐるのではな

思ふのであります。 上で考へなほして頂きたいと 意味の「日本」ならば胸語 本」ならいくのですが、單に が、この「日本」は ねしたいと考へてゐるのです 内地にもねなれて」といふ 本とい 」といふ意 一度個人的におたづ ふ言葉の使ひ方を私 がありますが、 味の「日 「日本人

一=今内地を離れた句が ります。 やかなものだと思ひます。 満な雰圍氣が遺憾なく出てを 秋=夕凉みの情景なり、回 ジイワリと妬くのもい」 わと夕涼み

せう。 ふのも 丹路=これは豆秋さん!奥さ 夫に話しかけてゐるのです。 のかどつちですか。 妬くのを奥さんが詠んでゐる ん自身が妬くのか夫なる人が =だれと、 =矢つ張り夫に妬いて貰 偶にはい」もんだと、 だれの會話

其の日本人の民族性と、その

てゐる事ですが、 題になりまし

た序に、毎號出 戦地の句に

あります。

かろいふやうな狙

が随分見受けられるやうで

の風習との関係にふれた

ひ方は川

柳に課せられた重

石鹿

と共に仕事をしてゐて、一緒 ら受ける感じは、ほんとに和 唄ふ歌といふものし願和か (美奈子) 聞こえます。 凉むのもよい、 トな問題だ。 孤篷=この「と」 話になりません。 腹乃 =「と」を入れ といふ風にも は

がまし 一萬圓そんな夢なら見 夏 ぬ 子

紫香=私はこの作者を知つて ですが、女の人と云ふものは るだけに提出しにくかつたの

> た私は急に大きな弊を出し 痛みは感じなかつたが血を見

T

かけて行く。

あとは妹や裏の

た姉も、先生と相前後して出

その頃小學校四年生であ

思つた時は、もう真ツ赤な血

ひ、

私達と一緒に朝飯を喰つ

て『小母さん行つて参りま

と出かけて行つた。

氣よく起き出して來て顏を洗

云ふと『アツ起きよう』と元

けであつた。『今七時や』と うても判るのは一時と六時だ

たからたまらない。アッと

噴き出してゐた。さしたる

あるが、私の左足の小指であ であれば何のこともないので 土地へ降ろした。それが土地 なりが躍動して來ると思ひま 方が夕凉みの情景なり、人物

てゐるやうな感じを受け

さらいつた場合内地人

妬きながら ムデリ ないと會

> さげて私の真似をするつも 妹が自分の體より大きな鍬を

あったのか、どすんと

時計がどうしても一人で見わ

八角形の古呆けた獨逸文字の つて母に時計を見てもらふ。

私は又階下へ降りて

漸く一尺ほどの穴をあけて、

WAAAAAAAAAAA 定休日·毎 /月曜日 // 餐業時間 9時-5時 ろぎれでぐるく から母が飛び出して來た。私泣いた。泣聲に驚いて裏の方 の露路で小さくなつてゐた。 る。妹は私の泣聲に驚いて横 の上へ百足の油をつけて、 こぼれるほどぶつかけた。 つて、一升徳利の石油を庭 の足を見るなり直ぐ抱へて歸

と説明的になりすぎる。その れてますな。 不用です。 =さらだとすれば「と 然し會話を巧く取り 「と」を入れる

を感じました。半島人同志話

何から和やかさといふも

0

鮮人もところどころは唄

豆秋 =

わかりません。 くのか、或は妬

てゐるのを聞いてゐますと

と歩んで行きたいとい 分になるのではないかと思ひ てしまへ 現在の環境をしつか b

> である。 傷は今でも左足の小指に残つ (國民學校)の先生に貸してゐ 又その 頃、二階を小學校

捲きつけ

一杯入れてもらうと、

ぐらひは飽かずに水遊びをし 花を拾うて來て、これで半日 您

0

木があつた。盥に井戸水を

である。そとには大きな柘榴 なかつた。裏は酒屋と垣一重 酒屋の子と遊ぶより外仕方が

を起こす役目であつた。 よるケン くれるゼエ、生徒がみないき たものだ。朝はいつでも先生 が床屋へ行くにもついて行つ て可愛がつてもらうた。先生 『先生もう起きんと學校 私は先生先生とよく慕つ な

岐の中から眠むそうな聲でウ 帳の中から眠むそうな聲でウと二階の踊り場から云ふ、蚊 最初、 母 榴の花をちぎつたらいかんゼ 尻の方の重味で真直になつて にも、水瓶にも、 今日はその井戸替へである。 花鰤の方だけが上を向く「柘 いてくれる。それから擔 エ、大けえなつたら上げるケ • ケン』と、いつも酒屋の小 柘榴の下に井戸があつた。 さんの口癖である。 花をちぎらんやうにナ腎 盥に一杯水を取つて置 の花を盥に浮 水をひたし かすと、

う解されますが、一般の人が ちの何と思ひます。 讀んだら債券の一萬圓と間違 つてゐられるから、此句をさ 笑 = 紫香さんは御本人を知 るやうな句ですね。

句を男の一萬間に對する心 に寢る 萬圓ファンと云つて草 =路郎先生の

境とするなら、 いかと思つて面白く考へられ の一萬側に對する考へぢやな て世話女房を代表する女性達 或る意味に於

圓と脅やかされてもピンと來 貨幣價値も變つて來て、一萬 その時代には、一萬圓もなか ぬやうな氣がします。 は十年ほど前の句ですかな。 \魅力があつたが、現在は 一萬圓位なかなか儲らず =冷刀氏

孤選=要するに、 の效果を損じてゐるやうに思 澤山あるので、紫香さんが云 丹路=その上、一萬圓 女の心境云々は別として、 はれたやうに比喩的に を冒頭に持つて來られたのは 一萬圓は最 一萬圓 の句が 何

の計劃に對して、めつさうな ひます。 直に言ひ表はしたものだと思 と云ふ世話女房の心もちを卒 す方法を株でも買ふと云ふ夫

みばかりになつて來た人、

身寄りの少ない女であらうと あはれな姿となつてゐる。 ますが、すでに、 の手を入れる。藝者が、なにが の恵んでゐる方の藝者も何か 付けどころの句であると思ひ がかりの(現役や……と孤鋒氏、合 と云ふのは、藝者のなれのは 腹乃 =要するに、この句は紫 しの金を惠んでゐる情景が、 てだと思ひます。それへ通り 香さんの説明でつきてゐます 人生の裏を穿ち出してゐる見 笑=「なれのはての乞食 めぐんでゐ なれのはての乞食へ藝者 藝が身を助けると申し 助ける頃 一柳

孤產

思ひます。

すてる藝はじめる藝にう のやまれ

ですね。 石鹿 といふのがありました。 =新派の舞臺みたいな句 名 包

す。 劇であり、喜劇でもありま 孤選=勿論さらですが、 「すてる藝」の句の場合より 親のない子、 も一層みぢめな川柳的悲 人生の下積 20

に紫香さんが云はれたやう

なにがしの金を一萬間に殖や に現在の一萬圓でなくして、

繪葉書へ公用と云ふ族に 公用で來て京の街せわ

30

公務なり公務なり雨ついて出る

しな

女

形

公用の飯を喰つて

る

留

置

場

親の脛嚙るを止せと公用

來

公用は茶の一杯を飲まず去

公用と言ふのへ男醉ひ 公用でたつ若

营

ず

公用と虎の威を借る

詩

負

公用の鞄

の中

に子

玩

公用で出た彼と會ふ野

球

れ尉

旦

那

少

殿

滑稽味があるのです。そとを ない人の滑稽味との間 するに不幸續きの人の滑稽 だと思ひます。 は、さらいふ意味で大變結構 時に悲劇をも知つてゐる萬人 狙ふことによつて、喜劇と同 交へた喜劇、そこにこそ真の と、ほんとに朗らかな屈托 の胸にピッタリと來る此の句 きな隔があり、前者の悲劇を にには大

ば云へる境遇にあるをかしさ どちらも、なれの果てと云 藝者とを對照にさせて、其癖 乞食と派手な衣裳に包まれた =この句はみすぼらし

> ば、あとは溝へざあんくと流 匙、これは内が去年冷してあ た。いろんなものが上つて來 くと、誰か一人男の人が井戸 ある。だんと深くなつて行 くるくまわりながら泳いで 緋鯉が二匹。擔へ桶 れて來る水が次第に濁つて來 の中へはいつて行く。溝へ流 と父や酒屋の小父さんの話で ねた。『大分大けえなったナ<u>」</u> 水が足を洗うて つて遊んだ。冷たいきれいな した。私達は裸足で溝にはい これは内が落した水の 番先に上つて來るもの だけ水を取れ 快よかつた。 の中で

> > 明る朝、

拡をのけて見ると、

戸へはなされる。私達は又柘れてゐた。擔へ桶の緋鯉が井 きれいな水が井戸に一杯あふ

の花を拾うて來て、盥で水へはなされる。私達は又柘

杯づく皆

んなにまわつて來る

へる、上つたラムネが盃に一 その上へ洗ひ米やお神酒を供 新しい茲を載せて蓋をする。

何とも云へぬ美味であった。

つたラムネ、はては

やうに浮かんで來る。

の思ひ出が、懐かしく夢の

遊びをする。

井戸替へと柘榴

の花。

で上つて來た。

Applil.a 115 集 句

公用と言つても酒 0 b

用

山

雨

樓

選

公用

どしや降りへ遠い公用云ひつかり 東狂子 惡源太 丸太棒 正潮詩 朗 朗馬 花

> 視察とは別に首 公用を鐵槌握つ 公用と書いてテーブルだけがあり 公用に濟まぬ名所を見 公用の車窓へ富士も晴 出張土地の訛も覺えて へ眞夏の影 と雨に公用 の長 相 T 迫 は 0 人情 5 れている て戻 若 T Ł 來 h 味

公用がヘッドライトで闇を行く 公用と押したはんこは潰れてゐ 場 用 る 師 具 青々子 風 晶队 伊 太古 步 樓 風

戸替へが濟むと、井筒の上へかつた。泥をすくひ上げて井

井戸をのぞけばもう水はた

は ず 應 需 K b

谷 內

科

病

醫學博士 小 兒

谷 內 與

郎

公用が叱られてゐる髭

から

あり

公用と今日から捕虜でない腕章

公用

は 改 脹

公用の鞄 公用の鞄夜汽車

5

公用のタイプライター

娘の眞額

で

風 7

大阪市港區市岡元町 電話 西 八四 OPU 三八 二電車道 番

同)公用をやっっ濟せた生ビー

人)公用の大和

撫

又

强

(同)公用でなくもう一度來たいと 同)公用で出掛ける顔へ殘置燈 (五)丸刈りになる公用かと聞かれ

何かそんなものが見付かるだ 是が非でも共通點を見つけ出 であつた女の指との間 指と恵まれる方の女、 す。其結果、惠んでやる妓の 來ないかと、探してゐるので 食の方に美の残り粕が發見出 はなくし 孤篷=皆さん、この何の説明 ねるのではないでせらか。 生の姿を借りて作者が なほ面白くなる。 らう。さうすれば、 したいやうな氣がする。 はこれでつきてゐると思ひま 或は人生の悲しさ、 私は派手な藝者の方で 時は秋の夜、 て、なれの果ての乞 それを寫 處は我橋 との何は に私は 云つて 丹路 = 珈邃さんの見方はあ になるかも知れません。 孤達=玉の 石鹿=親切ぢやない。 りに親切すぎた見方だと思ふ 食は男だすな。 腹乃=それやつたら、 なれの果てかも知れません。 と見てわられるかも

見れば、其虚へゆくまではなも、なれの果てに近いと云は でせう。 れの果てだとは思つてゐない つき誰方かが、藝者そのもの 直感的に女だと思ひました。 葭乃 =私、 一笑=僕もさう思ひます。 ましたが、懲者自身にして、なれの果でに近いと云は 此句をよんだ時に 輿に乗るとい ふ事 3

なれのはてと唯見てゐると思 丹路=作者自身はどちちも、 ですが……。

公用

の腕

章

兵

顮 b 礼 b

= 藝者はそんな夢を描

公用へ決つた女

16 0 用

旗

を

公用に青 見送りのない公 公用をすまして

V

頭

宿

公用の鞄開襟シ

ヤ

"

面を美しく引立てたいと思ひ 北詰として此句の芝居の一場

乞食」を藝者のなれの果て

11

皆さんは

「なれのは

公用へ 公用 公用は故郷の田植を車 公用は故郷の驛 公用の第一 公用を新聞 公用は肩を叩 公用は上等兵に 公用は街の空氣を吸ひ 公用の鼻歌 目轉車で行く公用も旅 へ看守無言 ボタンしか 4 が 5 出 呼 T IC K 6 母: が 6 る 通 35 窓 2 若 2 击 ま 不 K がつ は 出 K 會 孝 さ 和 b 3 乙 め 3 礼 る る 道 b

獨斷だ

公用も五分までうそと母は知り 公用で慣れない上座しびれきれ 公用で征くトランクへ旗を秘め 公用のペタル眞面目 清 に踏んでゐる 重 貸 力 5 役衣 3 同默同神 同 同 葉 猪 彌俊

堅

母:

な す

同 肱 同 不 凡 曉 無 祥 水 二 平 明 坊 月 不士同同 周 同同柳 同同 千 郎 解 人 太 節 塢 3 光 魚 風

古き便りも友情の字が 友情にふれて夜露のやはらか 亡き友と通った道を振りか 不躾けな便りに友情味 友情がわかり墓前にひざまづ 友情に溺れてならぬ意地が要 友情にあまへて 友情は無言のうちにあふれて居 友情が今の築達を生んで吳 實印を押 女學生の友情卒 友情の子のことでくる歳になり 友病みて明日の試験を忘れか (佳)友情の輸血へ誓ふ 闘 (天)友情の包に熨斗も付けてき 地)ぼんぼんの友情しない金が有 同 同)友情のひたよるほに虫 同 同)默々とゐる友情に)友情に月も無上に照つて)あく君の心のなかによっとまむ せる へまで 友 温 と 8 病 3 羡 行 あ T で が 泪 Ŀ ま 進 不 3. 終

~ b

き 礼

b

記

青鐘潮周俊武翠子生花峰數士光 武翠丸太棒 不 天翠柳 群肽 東 丸風芳塢月水學 馬樂

き b b 礼 和和 7

CA

倖

け 3 4

(天)公用に己に克つた日がた。し 友

馬鹿遊びをした大盪の

この乞

鮎 美 選

周十 ·四之 略

(地)公用が濟な浴衣で來る巡査

協のベージ

崎住友産報川柳會は十四日午後七時 病院川柳會は十五日午後二時、▼尼 日、廿二日午後五時開講▼阪大川柳 麻生路朗川柳講座は六日、廿日午後 時半御津八幡宮で開催▼松坂俱樂部 ▼本社川柳忌句會は九月五日午後六 柳會は十六日午後四時▼大阪遞信 は十五日午後四時▼大阪警察病院 時開講▼有恒俱樂部川柳講座は十



開催陸海軍へ各三百圓献金した。 會は九月九日一十三日京城丁字屋否 協會主催の「大東亞戰完多川柳展響 日夜民團樓上に於て開催▼朝鮮川棚 廿日開催▼徐州川柳會は八月二十三 支部句會は九日、同婦人合同句會は 九月例會は廿日夜開催▼川・雑樓島 半米本氏邸で開催▼川・雑小郡支部

明氏(新京)は九月十六日満洲建國 れた。▼小畑自有浪氏(不朽洞會 賞金をそつくりそのまく國防献金さ 眞に榮えある二等賞を獲得されたが 村丹路氏(不朽洞會員)の令襲は九 の森半疊氏を迎へ歡談された由▼奥 仕事で大多忙の由、▼岩崎柳路氏 員)は目下線道七十周年祝典關係の 員)は目下商用で岡山方面の山から 新聞社がさきに懸賞募集した蒙疆貿 十周年祝賀の式典に参列された。 山を駈け廻つてゐられる由▼大島濃 (不朽洞會員)は九月八日夜、塘浩 「御臨いま敷萬の瞳澄みきつて」 (濃明) ▼福田山雨樓氏(不朽洞廊 岩崎柳路氏(不朽洞會員)は蒙礪

> 氏(京城)は二十六日來社 で入院、全快を祈る。▼津田體月冠 峰氏(岐阜)は九月十二日急性青炎 來社された▼淺田右聞氏(東京)は 決行されたが其後の經過も良好なる も早く全快されむ事を祈る▼市川周 御病狀が悪く御靜養中との事、一日 朽洞會員)は九月廿八日商用で上阪 由、御快癒を祈る▼小川恒明氏(不 ▼福田山雨樓氏(不朽洞會員)は九

席▼川・維下闘支部九月例會は二十

・維堺支部句會は、十六日午後六時

月六日、三男健一君を儲けられた。 明氏(謝京)の二男裕太君十月一日 が九月に長逝された謹悼。▼大島灣 ▼西田岬樂氏(不朽洞會員)の嚴ダ 午前零時永眠された。謹んで悼む

向つて右から七人目は白面人氏 書▼同廿六頁上段の寫眞説明中前列 の花道を觀る』は同七行目の旬の前 ▼前號十六頁二段五行目の『映畫男

社 0 回 板 覽

する兵隊さんがる

あると反つて心配 だと云ふたよりが

隨想集十

、複眼

ででで ・〇八

川柳眼で書かれた

大単は高鷲距鈍のペンネムー

三句。會費は三〇錢。 題は『神棚』と『雑草』、いづれも 幡宮(南區八幡町佐野屋橋筋角、木 十八時(警戒警報中止)から御津八 ★本社十一月の句會が十一月七日夜 網橋電停東一丁)で開催される。兼



★『忘れものを上

庵氏(不朽洞會員)は母堂が御病気

早く快應されむ事を祈る▼中島生々

月十九日臨災で入院された、一日も

のため九月初旬闘郷、自から手術を

ひ」は、堅いこと ★拙稿『銃後の匂

麻生路郎著 新川

本筋の川柳で 一粒選りの名句を剪め、その一句一句に、不即 定價〇・八〇

藤村誠一著・序女職生路郎・百田宗治

不離の評釋がしてある。

りだ。家から無事 かんでも書くつも 題小問題なんでも 柔かいこと、大問

麻生路郎著・柴谷宰舟書 で「川柳雑誌」に敬表されたもの。

頼りがあればホン 家から無事だとの るそうだが、私の 『銃後の句ひ』は 累卵の遊び 類例となる句が露山蔥めてある。

ていいだけの句ひ を報告するにつと 田孤篷著·麻生路郎序

漫畫三十二熊挿入。

トに無事だと信じ

一千六百年史 定價〇・九〇

堺市出島海岸 街の雑香(賣切)大 著者一人の創作・該史川梅の尖端をゆく 空(賣切)人の一代(賣切)

通二丁一八二 振替大阪三〇三九二番

三、豆秋、民郎、 **柳樂、生々庵、湧** た話』は久米雄、

春巢、一笑、栞、

廻*轉*椅*子

らしい雑誌を出したいと、編輯局は 太平洋に姿をあらはしたやうな素様 ★毎號好評なので、日本の潜水艦が

3、紫香、一笑、石鹿の七人。 ある。評者は葭乃、丹路、豆秋、孤 本社で開催した句評の集りの収穫で 張切つてゐる。 ★月評『川柳一ト筋』は九月十八日

夷一笑氏の『柘榴の花』、とりん 然」の顧稿、削田五健氏の『怪音』 に興味がある。 ★维文では西田 艸 樂氏の『草木徒

> た。それに「に面白かつた。時局多 石塵、自有浪、文三の諸氏を煩は ★戸田孤篷氏の『川柳世界史』及び 忙で、何かと忘れものかすることが 殖えたかも知れないが、日本精神、 監刊をとり戻すため締切を早めたの なければならない。 稿『川棚の近畿大和篇』の綴稿は 制精神さへ忘れたければよいとし

で側愛の止むなきに至つた。諒とさ

好評なので、本覵には二回分酸表し せである。 ★拙稿『初等川柳講座』は豫想外に た。 『大和篇』を休載した埋め合は

★本號の表紙は兄の出征後、兄に代 々しい姿をスナップしたものである

出席者(順不同)

方を漫談的に指示されたものであった。

迷・仙人・甲東・幽王・昇・湖心・文雄・ 路郎・乙平・紫香・彌生・綠葉・香林坊 博也・孤逢・三司・夜王・ 久人・ 正一・ 不二・鐘生・甲斐郎・銀之助・綠雨・豆秋

投稿清規▼用紙は原意用紙▼文字を正確に▼開催月日及場所記入▼締切は毎月廿五日▼投稿先は本社完 い 0 5 あ 3 句 走 創 れ

川柳雜誌社主借

柳 忌

九月五日 於 御津八幡宮

兼題「年寄

路郎選

故吉田清醋伯の手で描かれた柳翁の軸を床

で嚴酷に開催された。(忌日は廿三日である

が)例により兼題、席題の披講に次いで當夜 に、川柳忌が九月五日の夕刻から御津八幡宮

の呼物川柳紙芝居の開幕となる。作満並びに

説は戸田孤篷氏の苦心になるもので、第一

は江戸浅草の地圖をもつて始まり、柄井

き昔から下つて江戸に移り、明治、大正を經 的にスナップされたもので我等に句材の摑み と現時との比較にはじまり銃後の世相を川柳 て昭和に至るまでの變遷と川棚の襲達を緩々 してあたら、そうではなくて、柳祖の時代 (報の俳句部門第四分科に隷屬した話かと想 柳の誕生から俄かに筋は遡つて、川柳の起 に及び短詩型をもつて思想の交換をした遠 して除すところがたかつた。引續き路郎 「棚間に告ぐ」は最近日川協の人たちが 年寄も腰をのばして一二三 年寄がすいをきかして夜店に 年寄の日記は筆でかいてゐる 年寄の愚痴とは嫁は 年寄の日露の話聞 年寄をつれて満員やりすごし 年寄がゐて奥の間がきれひなり 年寄と云へば御機嫌 年寄の愚痴聞かされ 年寄のまだ世の中にさからふ 年寄が居つて縁談まとま 若年寄などく云はれてこましやくれ いぢめなさんななど、年寄嬉しさう 思 る三 悪くなり いてやり へども 6 等 車 氣 迷 孤 粟 九 幽 不 吐 玉 花

榮. 潮花・かほる・柱風・丹路・葭乃・アート 吐空・掬夫・默平・嶺泉・六龍子・ 栞 翻子・曹天・白面人・干斗・九

年寄りにも出來る仕事とは 年寄の三人寄れば 年寄の息 年寄の氣に入る女中 話 轉業へほんけに近い 年を もの覺への好い年寄を持て 御老體などと用事を云ひつけ か 苦しい紙 孫 しず 0 哀 云 餘 U. 風 U 甲菱郎 同 九 司 空 生 E

年寄を或日道具として 七味賣る年寄仲々品が 年寄は勝つたつもりで詫をき 年寄の愚痴聞いてやる如才な 民情の視察晶から 模型機の出來へ畠をニッ 白酸になれば脳霞じみて來 坪の畠も市場を 選 兼題「 畠 畠 一ざけ を よし 使 飛 行 る ひ 綠雨選 潮 栞 孤 不

聞き合せ畠の横で一人 廣つ場もいつの間にやら畠になり 畠つきなどと宿替へをするめに來 衝からの 島から取りたてですと振舞は 配給の歸り畠に用 恩給の暮しにでかい芋が これつぼちの畠へ見本ほど作 上役を訪へば畠へ呼び込まれ いろし、の案山子昌はよくみのり 今島は喜ば が出 符 Ш h 香林坊 かほる 同 桂 默 久 桂 紫 人 風 巫 風 香 天 香

だしぬいた猿智悲夏の陽にうとし だしぬけに南方からの便りが だしぬけに末座観いことを云ふ 席題 席題「だしぬけ」 一砂 煙 來 王選 香林坊 甲斐郎 紫 選 香

砂煙り無人の境を征く如 砂煙り立てく我が見はテープ切り 萬歳をはつきり聞いた砂煙 砂煙り白旗揚げるひまも 砂煙りニュースの中の兄の 砂煙り浴びて荷を引く車夫の 砂煙り補回の勝負つきにけり 砂煙りあびて子供はよく育 ゴールまであと一息 砂煙り農夫はハンカチなどあてず 砂煙り女くるりと背なを見 0) 砂煙 なし to b 銀之助 香林坊 九 不 嶺 綠 不 雞 湖 薬 人 斗 生

香林坊 花 鎏 砂煙り美事に跳ん 騎馬を追ふレンズの中の砂 砂煙りあげて係令無事 砂煙り軍需工場か 万肺で基地へ還った砂 ナミ 5 に 新 つき 煙 翻 記 h 蘇

蜘蛛の巣が風にゆれてる門構 蜘蛛一つそれからさわぐ女 間道の蜘蛛拂ひつ 科學する心で蜘蛛の糸を 砂煙りのあとタンボ・がゆれてゐた 弾着はまさに 正し 夜の蜘蛛足を一本置いて逃 蜘蛛一つ大きくゆれる山 むかしー〜蜘蛛人民を食ひしとか 蜘蛛の巣をつけて金槌返しに 蚊柱へ蜘蛛忙しく網を張り 蜘蛛の巣をつけて電工首を出 名人の思案へ蜘蛛が下って 蚊柱へかまえた蜘蛛のあたどれず 蜘蛛の巣を一本切つて蜻蛉死 指揮官へまともにのびる砂 蜘蛛の巣を張つて借り手のない平家 席題「蜘蛛 き砂 ノ寺下 4 煙 煙 0) 家 客 b b 潮化選 九 文 紫 甲 久 湖 Ŧ 司 斗 東

梅田支部句會(大阪)

子の指の先まつすぐに蜘蛛は逃げ

海晴れて水着姿の第 海見える座敷へとほす乳母 の 酒造る桶乾してあり海 今朝の海昨夜の荒れはうそのよう 海にきたへて海とたゝか 海見えて遠足の子等手をたっ 海よりの風に置りぬ孫 海行かば水漬く屍と 便り 來 太平洋監視の船に灯が監きぬ 0) 碧 鲇美報 紀 方 織太郎 眠 也 玉

海洋洋敵も味方もあらば 悲しみの捨て場を海に求めに 七洋を我が家と思ふ波まくら 海の子にたるかと坊や抱き上げる 海軍に兄あり 一家海が **沙童ども歸つた後** 世見える座敷トンボが通り 拔 殿線の海は生徒で眞黑 風鉛へ海 風 0 翻 3 網 こそ 好 來 4 け だ 吐 黑 三秀 榮 秀 靜 行 峰司峰坊峰波春

兵の家先祖の事も世に出

3

川

市多樓

小郡支部句會

E E

日の丸がはためく兵

兵の家部か

同

兵の家兄から見へる豪の居兵の家父佛壇に居ると言

買物へ來て家の子が氣にか

1

å.

- 園

友

九呂平

下關支部句會「下關

選泳の見等の

行

手

へ裏の

峰

市多樓 休 休 友 朗 報 スコールとはこんな雨かと子にもあり 自慢して反つてお里見すか され機札がお頭自慢の中へ來る 夕立をケロリ忘れた蝉 保険屋の今日は自慢を聞いたがけ お自慢の盆栽採の手にかゝ 汗のシャッ脱いで想へり連 あきらめた心へ搖 銀幕の勇士の 流踊り國民儀 禮 赤トンボ盆の來たのにフト気付き 缺けたのへ話を向ける集 初盆に亡き子の蔵をかそへて 等賞かち得た自慢 親が 汗に で始 手を合 ぐ盆灯 83 す 時 結 6 \$ 雨 h 3

一樂凡恆曉

下車驛を築しい夢の内に越

行に乗り乗越して又 戻 《越して上り待つ間を蚊にくはれ

不越してよかつたバスの事故をさけ

尼崎支部句會(尼崎)

海の子を獨り待ちつく糸をく 海の子が海へ還った眞

買物に子の注文も開 買物がチトあつたらし

Щ 來

真物も上手に小合貯

びて いて 夕立の風

更瘦を喜ば

せ

營養に何不足 なく 夏を 痩

せ

米 不

=

海の子となった我が子の初 海の子へ波あたどれぬうねりもち 沙干狩子はとれるたび母に つ げ 夕立に追はれて歸るトンボ 釣 夕立が來る迄稻田渡 夕立にビッタリ止ん だ 蝉 夕立へションボリ立つた盲

便り

いさを

市多樓

曉

む太平洋

珠

夏捜の頭

も並

んだ宙返

b

夏瘦の母を助ける水を汲

不

妻の

顔

此の暑さがんばる人のほとは落ち

日本語話せる捕虜が前に立 あやしげた日本語も居る占領

髪の恢復もせず秋の

風 ち

市多樓

福

日本語を知つて中間に巾が利 カフェーが塗り替へられた日本語

有難うだけは 日本語

で答

關好坊

地 ~ 3

る 0 目

風

井凡喜

平 樂 馬

市多樓

b

ヤシの木の下で習つた日本語

聚越しの女荷物が持ちきれ 版及明乘越すまいと 又 腹 む り 一次越を知らず歌迎待 ちぼける

ず

市多樓

骨

游

記 生 天 臀 生霧 蛙

井 勇 井 凡

蛙 記 蛙

死や角と道草に馴れ

嘘になれ 八月廿六日 於昭和莊 美知夫報 Œ

野宿また可たり今宵はいゝ

月

手鏡に小さくうつる 課長 無口變屈鏡も見ずに死んでゆ 継談へ鏡きれいに拭 未成年もう寂しさがわかり 未成年燃ゆる希望へ伸びて 行 遊草はビールの肴買 うて い灯を見ぬ少年の気が きこま さん Ш 强 九 3 L る L

(大牟田)

應名を待つ嬉しさも二十代 感傷も生活であった二十代

代 代 代

鮎水劑

關葉美客花

市代みんな南をあこがれ 十代晴れて征く日を待ちこが 工堤の下小犬が二つ轉んで 小閑地姐やの里を聞

課 博 紫 美 月

報

湯の街の隣り野宿も歌になり 明日登る豫定八合目の 賣る方の心忘れた戸が締 魚賣買 ブルジョアのキャンプ女中の恩を知り 東京に生れキャンプを樂し が 景色など選びキャンプの幕を張り 病名は院長さんの

顔 働いて先づ一服を太く喫 もう耳が聞へるらしい子の 母もやんの耳が足りない子澤 席につく娘耳たぶまで染 買物を干人針と持ち 姑と來て買物に逆はず 買物でモンペ訓練氣に まくごとの買物それも切符 複雑た手紙は明日の事 復维を捌いて 年の 工腹のやりば煙管は叩 製問品たばこがあつ て 喜 **支話器から課長の盤が嚴め** し 買物を小言で順を待ってゐる 買物は書までかゝる戸を閉 **影煙を誓つて叉も喫 ひ は じ め** 九月四日 於 早鐘講堂 物 簡に 取卷 功 テ で にされ か か か へる 知る する れ ば 8 か 10 85 3 O 疃 Ш 7 b せ v 國 失 報 坂本 紅之助 柳戀子 十四之 天 蝶 初 鵝 翻水 十四之 世志一 藤樓 子盛 一路 染 初 平 同 しげを 風葉村香 葉 舟 A 逸

寄風史 同鲇正 同 田

美二

親よりも子が熱心

な

晩のキャンプに背質ふ荷の重み

淵

豊中支部句會(豐中

いてる 紫香 清 前 報

簸川支部句會(島根縣 山內凡愚追悼會

雨漏かして常會の座 常會の歸り家賃の

がく 値

づ

踏

臨時常會旅裝のまくの靴をぬぎ

常會で漢

方栗を敦

志患へ醫者常會の座

をはない

常會で娘の事もたのま

常會へ嫁の

ゆる

藥を数へられる ・なのまれる ・なのまれる ・なのまれる

常會の時間 常會で默つたま」に時 常會の縺れは賢い馬鹿

が過

ぎ

平珍東

が來

甲

に一時

常曾の國民儀禮板につき重役も今日はお茶くむ常會日

あんずの實すつばき二十代の陽よ 廿代きれいな嘘を信じやう

常會へ女中代りに出して 置

3

仙若松

秋ざらり黄金の悪 靴下も繕ひますと獨り者 風九月野戦の友をふと思ひ 柱にも廊下にもうつる君のうた 玉吟はとこしへに生く御佛 九月三日 於 森山居 波 渡 る 綠之助報 笑朗 紅ン坊 豐次即 雨舟

その昔團扇の下繪も書いてあた

楠

暑さ來て行者のほら貝こだまする

七月十九日

白面人報 乙平

松坂俱樂部川柳會(大阪)

美人譜が得意女も好きであり

漫画家は鼻の高いを 見逃さず

秋の夜君を想へば 秋風が女 薬局の窓にあかるい・風 位 は 持 限 7 があり りなし 2 5 大 綠之助 雲 朗

神津支部句會(大阪

女史末だ市場の味を知らぬなり 炎天に喘ぎつゝ行く牛の舌 車神の記事で一面埋めてる 女史何か饒舌つて見 たい 咳 拂 女性の味方女史法廷に立つと決め 新聞の運動欄を見る若さ 快勝の記事へ眼鏡を 掛 な家になり女史といふ名がよく光り 初聞は叩かれてから投げ込まれ 聞が今朝は遅いと表に出 際演會何々女史と名を連 館を懸むに借しい ロモン戦夕刊はみた賣れたらし 簡品この新聞も入れてやり しめよ汝古ゆへ出世せず 壇に載つた新聞五 部 八月二十二日 於續泉居 初 號活 も買 大戰 け直 字なり 果 香林坊報 不二 伊太古 不二 乙平 岩菜女 林雁 茶 泉 心 情 堂 笑 水 洞

111 柳 會 (大阪)

アトリエも持てずに胸を病みつどけ 文士とも間家ともつかず髪 長し 先生とも貧乏綸かきとも言はれ そんな繪書きとは宿屋夢知らず 件講家の推薦人に我が名あり 下手な繪をかつぎ込まれて弱らされ 生を偽筆で暮す露路の講家 でレーライス許りで今日の薔冢となり 八月廿五日 於醫院二階會證室 利生報 利 同 柳 同 利 同 同 生 生

> 男ハンの悪口舞妓もついて云 髪少し伸びかけてゐる傷 親と子がならんで釣るはモロコなり 半ズボン「ギス」のやらな脛を見せ 思案するやうに眼病膝を撫 物尺でとる横着は 訊きに入つて窓口仲々出て來ない どつちが生意気だと窓口言ひ返し 窓口で出來た仲とはなりにけり 窓口へ小響で云ふは頼み 窓口の女の金齒よく光り 窓口の金は三度も敷 窓口をのぞけば女様を 點呼場汗を拭かぬをほめられる 窓口で恩給貰つてホッとする へそくりであるを窓口知つてゐる 窓口は他所の時計の見えるとこ 窓口を放れてすぐにコンパクト 窓口に居れば汽車辨たのまれる 支店長の訓示窓口時代 へら 說 なり む 增 摄 留 章 * 3 青一路 同 利 青一路 同 春 栞 柳 靑 一路 一路 秀 生 秀 生 巢 生 秀 秀

住友有信川柳會 (尼崎

夏やせもせず十八貫をピンとはね 教へ子へ擧手の禮する 點 呼場 白々し煙草の煙高 丸刈が無難にすんだ點呼場 新呼からチトえらそうに

届つて

來 動呼削内種の兄も若くなり 脳呼削急に増 日旗を掲げて捕虜は 煙 変煙家又の値 上に 怯 へたる 貯 3 草 か 吸ひ 吹き され 金 帳 公 路永 月 子 絋 風 禮 作 介風

> 出來心人生半分間に 出來心こうなれば面子つきまとひ 出來心かいと刑事は 先 手 打 ち 五十過もり出來心では濟まず 出來心子は引き取つて別れます 奥さんの萬引見逃がす外 厳東は雀が焼けて落るとか お點前へ一期一會の風が 湧いて來る汗へ算盤まだ合 飲めば汗飲まれば仕事手につかず 九十五度今日も三人 溺 この暑さ海へいつてもこの 眼の球へ汗が浸み込む 七月の見合の暑さ忘 出來心女房に噛んではき出され 勅任教授この出來心 何とする お家はん暑そうもない帶をしめ 出來心なれば許してやるもの 出來心とも思はれぬ抱き合 出來心牧師あつさり片をつけ 出來心貞操論をもてあまし 出來心起さす様に店 出來心でせうとデバート輕く出る 等は裸になれぬ夏の汽 前蜘蛛夜蜘蛛人の心の勝手 すぎ 12 を出 たなり は 商 吹 死 部 白面人 不二

釣合はぬもとを訳せば 出來心あんな 妓を 闡 出來心買へば下つて 青 出來心ヒスを忘れて飲みはじ 出來心ですよと叔母が詫びてくれ 出來心若さの爲ひにして了ひ 出來心間引電車で闘 級長がもらひ下げす。る 出來 出來心出世をすれば記事になり 家さから ふとした嘘も 口に出し 寸だけさわつて見たい轉 るな 出 くな 轍 生々庵 生々庵 伊太古 香林坊 正太郎 乙平 同 同 同 白面人 明 天

> 出來心生理作用とぬけてゐ 温かい家がなか 强情なとこ見込れた 課長 强山が通らぬ様に世が 强情をうまく頃てゝよく使 強情の角折られてる初年 強情と知れど其場は 譲ら 強情であつたが倉も 家 も 建 一十一母の言葉に振り向 來心一家一門考 つた Ш ヘザ かっ 12 來 な 變 0 兵 る b b + 7 卡 美奈子 博 Z

正太郎

泉

也

香林坊 伊太古 美奈子 ZÞ

同同 同

孤

遙

世

リポイド及び脂肪を主 (適應症故草) 体とせるものなり。 力を有する異種蛋白、 に 準據して 高度の 発疫 本州は非特異免疫學說 注射無痛、關作用絕無、用 性、並に化膿性器疾患に動 性、炎衝性、傳染性、數面 **揭**縣、其他各科、愈姓、蘇 炎、扁桃腺炎、中耳炎、產 流感、各種肺炎、肋(以)聽 し農汎に徙り著数を奏す。

三名英名 三名 100 管入 一〇一〇七人 二公五管人 * 一公思の管入 1810號入

法所軍、勢劾迅速、價格等

巷

發賣元 發試黑田藥品商會 大阪・東京

どうしても押通そうの一人つ 强情へ収容法 全腹に勝てず 强情弱 敬遠としらず 强情 云ひ張つてく淋しい 気の弱い男強情武器に 强情 4 出世の足しにな めて本圏者にかくらず鍼にこり 霊情が折れて來たのへ氣を遣ひ ればり强い妻へエへへと笑つとき 他の强情へらく、共に分るまい 强情が一人混じつて 情へ刑事も意地になった聲 トーへとして温情も気が 壁り 独情が買はれて守衛と云ふ 仕 前にまだ一軒 れそれが弱情だつせと丸められ くけられぬ我がかたくながふと寂 言情にはれては見たが惜しい終 監情じやないよいばらの俺の過去 で情といはず傳記は一躍 この人はこれだと強情通される 情た子やなと母もさからはず 発だと聞いて<u>强情</u>うなづかれ 情の見へ夕飯を後でやり 情と見込んだ上のお賴みさ 情にその掛合をまかしとき 列へ女の張 つて臭れてお膳の端に をせぬ子の强情に理もあって つて臭れる姉まで腹を立て 情者形式だけの世群でくる に似た子の張情を親あきれ 一匹强情に似て身を賣らず 言を入れず岩死した男 言にまで强情を書き残 一があるばかり が立退かず 情 悦に 見て 座 つて來 か 闢 い意志 り道 つっき 入り する る男 通 白 ま 美奈子 同同同 白面人 同嶺 同 同同同同 生々庵 同 同 正太郎 同 天 10 子

> 香林坊 同 美奈子 香林坊 伊太古 白面人 同 同 同 同 生々庵 同 同 不 不 同 同 10 心 泉 泉 鎽 碁をくづす音留守番がさせてある 搦手は日本犬が 引き受ける 大井のしゆみは水害からの お座敷は今日も開けずに今日も暮れ 無人とて大玄鵬は閉めたまゝ 無人なり無花果の質は熱し過 無人ですねと巡査はすぐ闘 ビールあるのよと母娘で劈を呼 あの寺にたつた一人で和尚住 牛程の犬を無人の家 に 別班のピアノ八月だけ弾か 手不足でだん | へ殖える女事務 父まさぬ邸の廣さ母と居る ざわめきが引上げた跡の佛 隣組無人と丈ですまさ 良くなつて看病の母邪魔にされ 看病のある日氷をせ がま 看病に妻の忘れぬ身だしなみ 复護婦がチップの

> 看護し始 病疲れて庭の月光吸ひに 八月十六日 * 餇 0 8 れ 礼 出 す b 4 7 九 灯 b る

> > 白面人

汗かきの女將の屋子がいと小さし

今日も亦一風呂あびて 君の 计の結晶されど五間札崩れ 易

恩

美

3

湖

0

同

口郷と知つても細の立 わしの若い頃を社長が又

一つ男 始め

看病に來た家政婦が母となり 口癖を真似た答案證まされ

是が非でも治つて欲しい氷 いじらしい看病院長ほめて出る

割る

口癖へ切り込むこつを覺えたり

お爺ちやん三度聴いたと遠慮せず 口癖の話題が遺る一周 先生の口籍眞似て立たされ

忌

口癖の念佛極樂へゆくつもり

アノネーと云ふ口癖がバンとなる

癖に辭めると云つて二年

經

聞かされてますに奥さん赤くなり

學を卒たらしと先へ死に 癖の禮を忘れて共

俄雨づぶ濡れとなり後 は 病人のねがひ天井へ夜具を

つ 獨り者天井の節の數も **貴寶室其天井も光琳** 天井の値段を父が言ひ 軒下でもう止むだらう止むだらう 卿叩き蠅は天井へそ れた 闘郷した子へ天井が低く 大井のあんな處 百年の木組の下の御 79里の家お札と天井板すくけ に 干社礼 臺所 閘 ま 見 知 傳 派 之 b ~ Z 蔅 久 嶺 不 盤 同

> 乃行 泉

白面人 乙平

> 俄雨逃げ込む村 俄雨木の下路もぬれて 山の宿東は晴れたまっで ありがたい雨なり稻の風も吹 世舟がそらゆくそらゆく 俄雨白い素足が 終點で出るに出 俄雨芝生みるみる生 きて 5 は半 削を 來 里 餓 降 行 俄 き b 雨 < 美奈子 75

伊太古

同 同同

有恒俱樂部川柳會(大阪) 八月二十二日 於高野山清淨心院 銳々報

生々庵

築

小さくとも祖先の汗の田地 れまでの汗を拭うて御用 中小業者整理統合 せ ts 符 か 波夢造

香林坊

同

Z

平

山彦に瞰れば親子が緩のやう 佛法僧聞いて來たの 風流の佛法 山を背に稲田を削に 山家にも八日を念ふ一族の むかしく文學青年なりし 父醉へば一高 時代 女文字らしい 薄 圏 薄墨で釣り燈籠の繪は 薄墨に不滅の富岳描 がれ 僕はまだ青年だよと永 青年を默々と看る致 青年の悩み南せんか 九月十日 僧 の話 源 北 の走り 描 授 田 する 古さん か た 赤 見 あ 2 審 b 义 b 樫 ゆ 美

篷

思友は家庭へ來れば 借金へ友達の名を並 反達か默つて百回拔 友達が調子はずれを 叉 闘 反達の顔は忘れず名 躬狀に友達甲

要のあ 4 笑 てく 3 を べて は か 忘 返 せれ事 同萬同 美

職友も責任のあ

る智 護

振

生々庵

呼かたきの踊りかけたへ 干等を勝手へ 持ち込む 俄

雨

丽

孪

御詣りの闘り看病市場へ 看病もいつしか妙な 咳をする 看病に經濟戰が續くなり

見舞客來ると看病まめ 病人の禮を看病背で開

看病も腹れ切ってる薬

蒲

傷兵へ看病にゆく

母親は見るものでない手術 **精分を攝れとお醫者は靴を**は 醫者の手を離れて好きなものをやり

3

同

同

あんまりな言葉に看病眼をつむり 最後迄看病したはこの

看病はそうかしくとさからはず

みとりする母を病気の子が案 じ 警報の中で看病花を 病室の窓を開いて外を見

力

看病は櫻の咲いたこといはず

同孤

遙

郎

とう苦面するか看病買うて 來 看病が先に林檎の計を吞

3 る 4 嫁

判取りを肩から投げる仲仕 お茶屋あり仕入先あ 判取帳行の背中に栗 判取帳よくもこれだけ拂つたなあ 眼鏡越し判取制を固執 取帳開いたまムで無 取帳餘白のまくに世 つて b は 駄 去に 移り 同同 雷 美

まあ汗を拭けと機先を制せら

n

同

大阪遞信病院川

(大阪) 没食子報

九月十五日

若

ぐみ V

躓 莊

判取のついでに奥の 用も 町會の仕事でつまる小 判取帳押いたざいてかへさ れる 判取帳くずしへ足を 運ぶ なり 聞

判取へおつりを用意して來 てる

判取をかき (スキー誘はれる

郎

母の慈悲三行欄にあふれて居 殊動甲母といつしよに寫つされる 戦地にて始めて母の字を見 たり 子の手柄云はれて母は 動物関自分も好きな

ラッシュ時さて浪人は僕だけか 青年にしては汚な 無口だが仕事きつちり片付ける りゆうとした袴で策士仕事 仕事着の久留米絣に一寸 夕餉は何處になるやら仕事 員出しも仕事だつせ と 宇 放 す ほ 好 同 雷 4

子を征してはじめて母は强くなり

れる

實正

インキ壺店の仕事も一要 2 たり 抽斗 賃 美 雷 歩の悪い役を母上嬉しがり 母の背の曲り加減も淋しらて 皆腹せて母は戦地へ筆をとり 母のぐち素直にきいて四十すぎ 母の眼にかすんで見える赤 子の事に母熱をあげ熱をあ 薄給の瞬令母だけ見て吳 腰でる子へ母郵便をそつとおき

借金をことわるに 職域奉公水樂持 この水が御利益あると、瓶に詰め 院へ行つた印の 母: 間 持 ですよと水 1: よい水 藥 没食子

莊

青年の膝が茶席でもり上

h

1身體して劍劇の 大部

同同同

徴用令青年きつ い

近

視 屋

な

見てゐれば 代へて見た圏 かこつまじなりはひ換へし人もある 明日わかる嘘を都の人は 世齢一つ云へず象牙の塔に居 またたけば月もまたたきしてくれる 注文をしたやうであり橋の月 ふりかへる過去へ月だけまん丸い 水栗喇叭飲みして 水郷下げて競馬へ出 問題にされてゐないか出しや張 働く身い人月ながら寢るとせら 月明だ渡洋爆撃愛つ お隣りは月見邪魔するビルディング 質別班月の眺めも云 ひ添 月見には自作の芋で語り合 ため息で見れば無情な月に見え 谷月にあるかないか 謂い程に効きそうも 水栗二つ抱 職の跡に明月冴えて見 えて 大方 者 4 の残 te 水 雨 0 V は 云ひ 氣 ~ 水 置 水 會 水 礼 る せ 0 燈 同 喜同 方 喜 竹 同 同 方 獨 喜 草 同 二由夫 T

口紅を墜る手荒さをちらと見る 聞かぬ日はあなたの額で子を叱り 打粉して明日を賴む日 同

正樂由二

沒食子 Œ 莊 由 由

美代子

由

由

同

IE 夫

莊

莊

配給所商人なるを忘れ 衣料切符忘れて喰べて歸つて 柱へ舊體制の老]1]

夫

媚 け 來

同 同

か

没食子

(徐州

炎天へ水筒 日本の强さを知つて 印 炎天に家内總 災天に老車夫叱る

氣になれ 印度にも同じ月照る 日の 近 分 は裸で暮す健かさ 七月十五日 出 於美容丸船上 の増 度立つ ず L ひろし 多々良 玉 草 人

句命報の事き方についてお願

し、開催日、會場、幹事の雅號等すべて同形式 を書かれたい。他の會は何々川柳會(××)と その下へ會場を、その下へ××報と幹事の雅號 如く所を書き、次の行に少しく下げて開會日を 部であれば、川維の二字を二行に書き、その下 に願ひたし。 じ形式で書いていただきたい。川柳雑誌社の支 句會報を書かれる時には必ず前號を参照して同 へすぐ××支部句會とし、その下に(大阪)の

主治効能 ロイマチス、神経痛、打撲痛 氣管支炎、扁桃腺炎、中耳炎 感冒、肺炎、肋膜炎

本劑は長時間使用出來るやうに工失してありますから持續時間は任意にし て支差へありません



事幹と部支

大愛大松大大大松鳥島大函大 阪 媛 阪 江 阪 阪 阪 山 取 根 阪 館 阪 申英柳將夢双八耕鐵綠鮎晟萬 仙夫太雄裡虎滿路州助美修し

魔翠秀春天柳美华紫久芳里文 米 + 置芳溪巢作路笑休香雄郎九庫

> (福島縣) 大牟田 一香一水井椋蝶賢美九角 林 知 將坊聲源蛙影人次夫坡堂

田米川龜大大沖鳥 村村村井谷 島野山 孝あ 五 五 次 元 表 花 晟 花 湯 五 =-介馬菱修村明郎步

末淺顯藤藤長長長田嘉笠片岡大長池 弘田原本村野岡崎中納原岡 谷澤 巖 卯 半 川 晴太柳辰 一弘 太 郎一藏助作濱郎秀二純生方

麻 斡 生 路 郞

古戶中川石戶高大寺岩奧永西福高橋 川倉島出井田澤西井崎村田田田橋本 竹天庵子人篷浪歩々路路九樂樓る雨

森藤蛭篠柴前安山窪生高谷 里子原谷田川本田方尾脇 東好省春二五留雨 波 敏亮素 魚古二雨即健美迷樓即雄文

岡丸黑正原中石宮須妹吉市村 西曾岡崎尾田場松 お根白豆九水食夢 田尾川本 某潮紫水史 人花香客風む郎峰秋滿車子裡

吉米西藤橋平田大水三內米藤岩古削 田本川岡本佐中坂谷輪藤本井崎川山 五本川 至波 五儀青藍夢平雨形鮎晚一志友山花北 雷助美瑶造三月水美翠郎子郎石髓海

篠高月齡夷植逸鈴多中西小清清清魚菊杉好濱中田樱西關押佐尾布北岩 山見木田內川畑水水水住澤原崎田原中川尾根谷竹崎施川崎 市智慧形有哪里友满松研申米统風不 た香山け附方類春松 竿坡樓芳水浪子路帆潮園子仙雄人葉水栞彦を子正川巢代

> 野長田小松福村長水明八井河上武谷德河浪野小飯酒小谷阿岩國 元谷邊川浦井上野谷石竹上田田部口永野 田三由觀帆 角井竹柳正湧一翠林綠雅夜 口川尾井林川萬崎弘物景文為海水忠 一型林維在交之柳恒與知文綠厲水牛 空司布堂船哲堂蛙莊次柳三將光坊葉美王介太明史夫月風的虹休

> > 詩族

集舘

民

郎

▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事。 ▲書體はなるべく楷書(川柳雑誌原稿) ▲書體はなるべく楷書(川柳雑誌原稿) 料封入の事。

(評論研究感想吟行漫文漫畫) 生生 郎郎 選選 會協化文版出本日 五八〇四壹壹 號番員會

稿

近作柳樽(雏吟

麻麻

路

集

(毎月五日

國榮

崎本

豆絲

秋雨

選選

十二月廿日

締切

(十句以内)

第二號課題

告 廣告部へ御一報下さいますやう。 本誌廣告に御用の節は川柳雑誌社

昭和十七年十月 一 日 行 昭和十七年九月廿五日印刷 置新聞紙法に據る 祭無腦轉載 本誌の刊行は有保

十月廿日 卷 月廿日 十二號課題 石曾根一 尾崎 方一 十句以內) 號課 統切 根柳 題 路 正人 選選 選選

繃新

九

定

ひます。轉居又は改勝等の節は青折半日ひます。御註文は何月號よりと御指示面 御註文はすべて前金で願ひます。 (大阪七五〇五〇)又は小爲特を御利用簡 振替

111 規格判B列5號 柳 毎月一回

集

誌 第第 十九 號卷

者本送名氏所住

★年観、戦線の勇士に送られたい方はます。

配給元 東京市神田區淡路町二丁目九番地 大阪市西區江戶堀上通一 行印刷人 麻 生 日本出版配給株式會社 電話主佐婦八八二二 幸 一丁月四六番地

行所 大支市西區江戸場上通二十大支市西區江戸場上通二十大支市西區江戸場上通二十大支市西區江戸場上通二十大支市西區江戸場上通二十大支 亍社

して最適 料品・菓子等の容器と

電話事務所用

掛

組立式各種。藥品。食

紙 丸形・角形・小判形・

大阪市住吉區晴明通一丁目四〇番地

16枚撮り

||型F4.5付 ¥117.00

F3.5付 ¥ 141.00

距離計 至 21.00



大 阪 市 周 區 順 慶 町 四 丁 目 電話船場905・1905・1396・5095番



其 0 他

ルビ倉庁目丁二浜北市阪大

(4)番六三六六(23)浜北話電



片瀬醫學博士述 安産のために」册子呈上

SENRYU ZASSHI No . 2 2 5

Published monthly by the Senryu Zasshiaha, Osaka, Nippon.

